
Virtual Mind -Bondage Conect Online

迷音ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Virtual Mind - Bondage Connect
Online

【Nコード】

N0360T

【作者名】

迷音ユウ

【あらすじ】

201X年。世界初バーチャルリアリティ技術を駆使した、仮想空間を体験できるオンラインアーケードゲーム「Bondage Connect Online」通称BCOがテスト版として公開された。テストプレイヤーに選ばれたのは、PC版BCOをプレイしていた15歳以上の人々。ある日、高校2年の疾風はBCO、VRAC版のテストプレイヤーに選ばれる。疾風は喜び、テストプレイに向かう。しかし、テストプレイのさなか、システムが暴走をはじめ・・・

バーチャルリアリティアーケード

（アットノベルスよりお引越し）
！一カ月半以上も更新できずにすみません。ゆっくりですが、再開していきます！

プロローグ（前書き）

中1のころに思いついたものを、ソードアートオンラインを基にして練りました。ほとんどSAOのぱくりのようなものですが、よろしくおねがいします。

プロローグ

序話

自分のHPを示すバーがもう、三分の一を切っていた。通常緑色のそのバーは、今、警告色である赤色になっていた。危険だ。ハヤテは今、大型の竜となった一人に対峙していた。黒い鱗をもつその竜はところどころ骨が見えている。その見た目はゾンビを思わせる。

『アンデットドラゴン』Lv???。

この敵は『ボス』なのでレベルは倒すまで表示されない。「？」が三つあるところを見ると、少なくとも100レベル以上なのだろう。ハヤテのレベルは114。中世のヨーロッパを感じさせる鎧を身につけ、きれいな装飾の、柄が金色の剣を握っている。おそらく、このレベル、装備を総合した能力値なら、このドラゴンを上回っているとは思うのだが、このドラゴンは厄介なところがある。

それは、回復能力。アンデットとだけはあつて「不死」を感じさせる驚異的な回復速度。幸い、三分の二以上は回復しないようなのだが……。こういう敵は大人数で一気に攻めるのがよい。しかし、今は一人だ。さっきまで一緒に闘っていたパーティメンバーが三人いたのだが、一人は「回線落ち」し、あと二人はドラゴンの魔息^{ブレス}にやられた。ドラゴンの魔息は魔法攻撃判定。しんだ二人は物理専門の職で、魔法攻撃に弱すぎた。結局一人。

疾風はハアとため息をつき、チャットウィンドに文字を打ち込む。死んで、ゴースト状態になり見学しているパーティーメンバーに、承諾を得て、疾風は一時停止アイテムを使った。ポーズアイテムは

とても高価で滅多に手に入らない。このまえひょんなところで手に入れた。まあここで使うのは惜しくはない。

画面が暗くなり、静止する。

オンラインゲーム「Bondage Connect Online」
。通称BCO^{ビシーオー}。

仲間と戦うことを再前提として作られた、ソロプレイヤーにあまり優しくないゲーム。

もともと、四人で行くのも結構無理があったのだ。このボスを倒すための推奨人数は六人。自分たちの力を過信しすぎた。疾風はパソコンの画面をこつこつとたたく。

「さあて、どうしようかな・・・」

とりあえず疾風はポーズ時間の限界である五分の間に作戦を立てることにした。26時32分・・・別に眠たくはない。徹夜ももうなれたものだ。冬休みに入って二日目。ほとんど寝ていない。

BCO、PC版がサービス開始になってからもう、一週間がたつ。

BCOの人気は半端がなかった。まだ一週間にもかかわらず登録数は一万を超えていた。特に特徴のないこのゲーム。なぜこんなにはやっているのだろう。普通にキャラクターが剣、魔法を使い、仲間とともに敵を倒して、レベルを上げていくゲーム。まあ人気の理由はおそらくあの二つだろう。

一つ目は、超がつくほど美麗なグラフィックス。有名CGデザイナーを総動員し、最新のCG技術が使われている。その美しさ、リア

ルさといったら、本当に感動する。しかし、それのおかげで、低スペックのパソコンではまったく動作せず、BCO専用パソコンが多数売られているほどだ。

二つ目はゲームのボリューム。とてつもない数の、モンスター、武器、魔法、そして、ステージ。その無数ともいえる数がゆえのゲームのやりこみ度の高さ。

まあこの二つがたくさんのプレイヤーが集まった理由だろう。．．．いや、あとひとつあった。おそらく全プレイヤーがこのゲームを始めた理由を．．．。

疾風が頭につけているヘッドホンからピピッ、という音が聞こえてきた。ポーズ時間が残り十秒になったことを示す、警告音だ。

「あ．．．何にも考えれてない．．．」

十秒がたち、画面の暗転がとけた。再び、ボス戦が始まる。ちょうどその時だった。チャリンという音が鳴り、画面の下にポップアップが出てきた。

マナさんがログインしました。

（ マナだ！ ）

疾風はアンデットドラゴンの攻撃を器用によけながら、さっとポップアップをシングルクリックする。画面下に今度は、確認ウィンドウが出てきた。

フレンドコールしますか？ Yes / No

疾風は迷わず Yes を押した。

「フレンドコール」とはその名のとおり、フレンド呼ぶことができるシステムだ。パーティーメンバーが上限に達しておらず、なおかつ、そのフレンドがオンライン（フィールドに出ている状態）以外のときに使える。呼ばれたほうはそれを承諾することで、呼んだプレイヤーの元へ瞬間移動する。^{レポート}

ほとんどの間もなく、そのコールは承諾された。ハヤテの近くに魔方阵が展開され、それは光りだした。約三秒後、そこには人影があった。彼女がマナだ。動きやすい、軽防具を身につけ、手には西洋剣^{ピア}『ドレスソード』。銀色の長い髪が特徴だ。といってもアバターなのだが。

『ログイン早々呼び出しで、なにかとおもったら、AD^{アテンション}なんかで手間取っちゃってんの？ w w 』

『むっ』

このゲームの話す手段は文字チャットだ。音声チャットは、ゲーム容量の関係で実装されていない。

この上から目線の彼女とであつたのは四日前だった。

疾風がBCOをプレイし始めて三日目のことだった。比較的初期はレベルの上がりやすい仕様になっているので、ハヤテのレベルはす

でに40レベだった。その日は、ちょうどいいパーティーもなく、BCOとしては珍しいソロプレイによる、フィールドダンジョンをしていた。

しかし、ダンジョン中、ある森の中に入ったときのことだった。そのエリアでSランクのレアモンスター『ゴールドゴブリン（GG）』が出てきた。レベルは49。しかも、このモンスターは物理防御力が高いので有名だ。小型のモンスターのくせに、通常は二人で狩るようなモンスター。しかも、しかもだ。運がいいのか悪いのか、GGは同時に二体現れた。疾風はレポートキーを使おうとおもったが、GGのパッシブスキル『逃走不可』でそれは妨げられた。

GGの猛攻に、ハヤテのHPは残り一割にまで減らされた。そのとき、ちょうどソロプレイヤーが来た。そのプレイヤーがマナだった。マナはGGにもてあそばれているハヤテを見て爆笑していた。（といってもチャットだが）

『そんな雑魚も倒せないの？ww私が倒してあげようか？』

果てしなくうざかったのだが、このままでは死んでしまうので仕方なく頼んだ。

マナはその手に握る西洋剣^{レイピア}を振るい、その圧倒的な力で二体のGGを瞬殺してしまった。GGのポリゴンは黒い霧となつて、空間へ蒸発していく。あとに残ったのは、金色に光る直方体　　レア金属『ゴールド』だ。

まあ、そのときフレンド登録したわけなのだが、なんだか悔しかったので今、必死にレベルを上げている。

『さて、ちゃっちゃとやっちゃおう』

マナは、武器ウィンドウを操作すると、もう一本の剣を出した。長^{ロング}剣^{ソード}『カーテナソード』だ。SSクラスの激レア装備。それにしても二刀流。どうやらマナの職はソードマスターのようだった。最初見たときは、細剣使い（フェンサー）とおもっていたのだが。

『あなた、VSLでしょ？後方支援魔法よろしく』
ヴェサテリニールソルジャー バックマジック

マナはそう言うと、ADに向かって駆け出した。俊敏度を上げているのか相当な速さ。

ハヤテはしぶしぶ援護に回る。ハヤテのクラスは万能戦士^{ヴェサテリニールソルジャー}。よく言えば万能。悪く言えば器用貧乏。しかし、剣、魔法ともに使えるので、初心者に圧倒的な人気を誇る。まあ疾風がVSLを選んだのもそれが理由なのだが。

ハヤテはすばやく呪文を詠唱する。詠唱時間はさほどでもない。すぐに、ADの下に、小さな魔法陣が現れ、次の瞬間、バチツつと強くフラッシュした。それと同時に、ADの動きが鈍る。低級魔法『ライトニング』だ。効果持続時間は短いが、対象をマヒさせることができる。

『サンキュ』

マナはそう言うと、タツとドラゴンの顔に向かってジャンプした。ADが魔息^{ブレス}を吐いてきたが、マナはそれを空中回避する。そしてマナはドラゴンの顔めがけて、二本の剣を振り下ろした。とてつもない連続斬。カーテナソードの固有スキル『カーテナラッシュ』。初

心者が見ると、ただ剣を闇雲に振り回してるようにしか見えないが、実際この技は、タイミングよく、さまざまなコマンドを入力しなければ途中で止まってしまふ。実際は七秒にもわたる大技だ。空中で発動する場合、位置が固定される。

ADのHPがみるみるうちに削られていく。

疾風は思わず息をのんだ。その剣技があまりにも美しく見えたからだ。

バシーン！！大きな音を立てて、コンボの最後の剣撃があたると、コンボ数はたった一人で700を超えていた。さすが二刀流。

ググググガアアアアア

ADは回復する間も与えられず、その場へ倒れた。そしてシューという音を立てて、黒い霧となり空間へ散っていく。それと同時に壮大なファンファーレとともに、画面にQUEST CLEARの文字が出てきた。

ハヤテはあわててお礼を言う。

『ありがとな・・・任せちゃって』

『いやいやー別にいいよー。ザコイ人を手伝うのも、上級者の役目ってね』

発言がカチンとくるが、必死にそれを抑える。

『まあそれにねー。ちょうど、ADの素材がほしかったし』

『・・・・・・・・・・』

『そうだ、あとで私の「マイルーム」にこない？たまには雑談でもしよーよ』

そっぴい残して、マナはどこかへレポートしていった。おそらくマイルームに行ったのだろう。

「雑談かぁ・・・」

最近ひたすらレベル上げて、そんなことまったくしていない。・・・たまには、息抜きのいいかもしれない。疾風は画面を操作し、フレンドリストを表示させる。パーティーを解散させた後、ハヤテはマナのマイルームへとレポートした。

ブローグ？

『ようこそ、私の部屋へw』

『・・・さつきはありがとな』

疾風は再びお礼を言った。

『全然大丈夫だって。それよりさー。あと三日でVRAC版のテストプレイヤーの発表があるよね』

『あつ、そうだったな・・・』

このゲームが人気の最もたる理由。それは来年冬から稼動予定の、CBOのアーケード版のせいだった。その、CBOのアーケード版は、世界で始めて仮想世界を人間の脳とリンクさせ、自分の体でヴァーチャルワールドといっても、精神だが、でVRを体感できるシステムを採用したゲームだったからだ。そのテストプレイが一月にあるのだが、それに行くためにはこのPC版をプレイしていなくてはいけない。

『そつえばあれば、抽選だろ？』

アーケード版のテストプレイは、十五歳以上のPC版プレイヤーからランダムに選ばれることになっていた。十五歳以上と制限があるのは、十五歳未満のVRの使用を世界的に禁止しているからだ。悪影響を及ぼすかららしい。

『それなんだけどね・・・噂によると完全にランダムじゃないらしいんだよ』

『どういつこと?』

『それがねー・・・』

マナは自分のステータス画面を表示させる。今疾風はマナのマイルームにいたので、その画面は、疾風の画面にも映る。Lv148・・・。

『おつ、おまえ・・・さらにレベルあがってんじゃないか』

前見たときは124レベルだったはずなんだが・・・。

『そりゃーレベル上げてるから、レベルは上がるよwww』

『・・・で噂ってのは』

『そうそう、抽選はレベル150以上の人だけって言う噂』

『150!?!?』

このゲームの最高レベルは現仕様で300。150ということとは・・・、その半分。

『その噂本当なのか?』

ハヤテのレベルは114。もしその噂が本当なら、急いでレベル上げしないと、抽選もれする。しかし、あと三日で36レベルも上げられるのだろうか・・・。

『信憑性は高いとおもうよ』

疾風はハアとため息をつく。

マナはハヤテが急に無言になったところから、おおよそ、今のハヤテの気持ちを読み取った。

『私が、レベル上げ手伝おうか？速攻レベル上げの方法知ってるよ？』
ピロリンという音が鳴り、画面に確認ウインドウが出てくる。

パーティーへの参加が依頼されました。参加しますか？
Yes / No

疾風は一瞬迷ったが、どうせ、あてもないのでYesを押した。

『じゃあ、行こう』

マナが言うと、疾風はいきなりテレポートさせられた。テレポート先は、レベル130推奨のダンジョンだった。

『大丈夫かな……。俺まだレベル114だし、正直きついぞ？』

『あゝ大丈夫だよ。
経験値はパーティ分配式にしているから。
放置してもレベルは上がるよ？w』

『……といってもな』

『大丈夫だって「アーツ洞窟」に行くからね』

「アーツ洞窟」はレベル140推奨ダンジョン。別名、竜の巣窟。ドラゴン系の大型モンスターが大量出現し、プレイヤーからは、S級危険区域とも呼ばれている。

疾風は再び心配になり、

『本当にいいのか？』

『大丈夫。』

レベル160ダンジョンぐらいまでなら、ソロ狩りできるから』

マナのレベルは148。12レベルも上のミッションをソロプレイできるとは・・・、恐ろしいほどの強さだ。まあ、実際に、マナはBCOの上位プレイヤーの中でも5本の指に入る有名プレイヤーだ。確か、二日前に行われた、プレイヤー総合ランキングでは、4位だったような気がする。BCOの総合プレイヤーランキングは、レベルだけではなく、装備、所持金、今までの戦闘成績など様々な要素を数値化し、総合して割り出す。例えば、マナよりランキングが下でも、200レベルを超えるプレイヤーはいるということだ。しかし、総合的にはマナに劣る。ちなみに、ハヤテは3968位だ。

と、自分の弱さを心の中で噛みしめっていると、

パーティ参加希望者がいます。

(参加希望者・・・？)

『このパーティ『開放』してたのか？』

『うん、そうだよ。』

まあ、レベル制限150だけど、そっちのほうが効率がいいでしょ？わたしの得にもなるし』

それもそうだが・・・。

マナが言うと同時に、新たなパーティ参加者がテレポートしてきた。

ユウナ　さんがパーティに参加しました。

『こんです！みなさん。
よろしくね』

近くに現れたのは、女性のアバター。マナとは違い、髪型はきれいな、スカイフル空色の短髪。装備は・・・、これはウィッチの服だろう。どこかで見たような、魔女みたいな格好をして、魔女っぽい帽子を被っている。手には、なにやら、先のほうに宝石が埋まっている杖。クラス完全に職はWICのようだった。疾風も久々に見る、魔法専門の職。

『魔法職って珍しいですね』

ハヤテは、思い切ってユウナに言った。

『そうかなー？』

てか、丁寧語？やめてよ。タメでいいよー』

『あ、ああ』

実際、BCOにおいて、魔法職というのは珍しい。というのも、魔法職が初期のクラス選択時に選べないからだ。100レベル以上で

受けることができる、あるクエストをクリアしなければ手に入れることができない。しかも、攻撃力が低く、使いにくい。

『そういえば、このパーティーってレベル上げだよね？何でこんなにレベルはなれた人がいるの？』

どうやら、ユウナはハヤテのことを言っているようだった。

『ああ、それは・・・』と、打ちかけたところでマナに先を越された。

『それはね、ハヤテ（こいつ）がVRAC版の抽選漏れしないように、後残り少ない時間でレベル上げるため。

わたしが手伝ってあげてたの』

『なるほどー』

『まあそんなパーティーということなんだけど、ユウナよかった？』

『うん。別にいいよー。こっちはもう150超えてるし問題なしw』

150越え・・・この部屋の制限レベルが150だったから、そうなのは分かっていたが、改めて聞くとなんだかすごい。

『ユウナは何レベルなんだ？』

ハヤテが聞くと、ユウナは自分のステータス画面を表示させて、可視モードにした。普段は不可視になっていて、自分にしか見えない仕様になっている。

『え、すごい！213レベ！？』

『うわっ、まじかよ。・・・ってしかも、前回のオフィシャルランキングOR2位じゃねえか』

『wwいやあーそれほどでもー』

『すごいすごい！わたしよりランキング上の人とはじめてあった！
ねえ、ユウナ。フレンド登録してくれない？』

『いいよー』

フレンド登録。これがこのゲームの中で、最も重要なシステムだ。
さっきも、フレンドを呼び出せるフレンドコールをしたが、フレンドを登録しておくと、様々なメリットがある。なるべく強い人とたくさんフレンド登録することで、ゲームの効率は格段と上がる。

『俺もフレンド登録してくれないか？』

『えー……。ごめん。私は男の人とはフレンド登録しないことにしてるの』

「・・・・・・・・・・」

断られた。普通のネットゲームなら、男女を偽ってプレイすることも可能だろうが、このBCOは少し事情が違う。BCOは、普通にネットで登録して、ネットからダウンロードするというゲームではない。きちんとゲームシヨップ等で、ソフトを買わなければいけない。その際、レジでID発行用のシリアルコード登録をする。そこで登録するためには、身分証明書が必要となり、もちろん、男女の

確認から、年齢まで比較的細かく登録される。

『じゃあ、話もこれぐらいにして、そろそろ狩りに行きますか』

フレンド登録できないまま、結局マナに話を打ち切られた。疾風はチラッと部屋にかけてある時計を見た。深夜一時を回っていた。今日も徹夜になりそうだ。

『よし、じゃあレッツゴー!!』

ユウナがそういうと、3人はモンスターの巢食う、遺跡へと飛び込んでいった。

第一話？

閃光のごとき、一太刀。目の前にいた、ワイバーンキングはどさりとその翼を落とした。今まで飛んでいたのだが、片翼を失ったため、バランスを崩し、地に落ちる。

『よし、いいよ！後は炎弾に気をつけて』
フレイズバーン

ハヤテは自分自身に補助魔法をかける。一時的に物理攻撃力が上がる魔法だ。呪文詠唱が終わり、疾風は赤いオーラをまとう。

『ユウナ、補助よろしく！』
『了解！』

ハヤテは前へ、跳躍した。怒涛のスピードで、ワイバーンキングWKに迫る。WKは気づいたように、首を上げ、大きな口を開き、連続して炎弾を放つ。
フレイズバーン

疾風に当たるかあたらないギリギリのところで、ユウナが高速詠唱で、呪文を唱える。スピードスベル高速詠唱は、レベル200で、ウィッチWICが覚えるパッシブスキル。通常の呪文の詠唱時間が約半分になる優れものだ。

WKは何かに気づき、顔を上げた。上空に魔方阵が展開されている。刹那、魔方阵からバケツをこぼしたように水が落ちてきた。

フレイズバーン炎弾は、水に打ち消され、跡形もなく消えてしまった。

ハヤテは水を受けつつ、さらに駆ける。

ヒュンと風を切る音。そのまま、長剣を振り下ろす。

ザン、とW Kの弱点である頭に剣がヒットする。クリティカルヒット。

W Kはそのまま、どさりと力をなくし倒れた。

『やったあ！倒せたね』

『うん。ありがとな。二人とも』

W Kは、黒い霧となり空気に散る。それと同時に、ハヤテの頭の上にある、二本のゲージのうち、下のゲージが変化した。見る見るうちにゲージはたまり、再び0になり、またたまる。経験値ゲージは一気に増え、ハヤテのレベルは150となった。

疾風はそれを見て驚く。

「すご……。こんなにたまるんだ……」

『これで、ハヤテも抽選漏れしないですむね』

『あ、ああ。ありがと。それにしても、何でこんなにたまるんだ？』

W Kのレベルはハヤテよりだいぶ高い、176。普通に考えても、ここまで経験値は来ないはずなんだが……。

『それ？それね、多分ユウナのおかげ』

『ユウナの？』

疾風は画面の前で首をかしげる。

『そだよー。経験値上昇のアイテムと、それと経験値上昇の魔法使ったの。それと、パッシブで「集約」もついてるから使った』

「集約」とは、パーティプレイのときに、全員に分配されるはずの経験値を、一人に集約して渡すことができるパッシブスキル。しかし、効果はスキルを習得してから、3回のみしか使えず、それ以上使うと自然消滅して、以後、使うことはもちろん、再習得もできない。もともと、習得自体困難なスキル。そんなものを使ったらしい。

『ユウナゝそんなものこいつのために使ったの？いいの？』
『かまわないよ。別に私使わないし。ああ、それと私そろそろ「落ち」るね。時間が時間だし』

疾風は言われて、画面右下に小さく表示されているクロックを見た。デジタル文字は、AM3:21を表示していた。こんなにやっていたとは気づかなかった。

『そうだね。じゃあ今日はここで解散かな。また明日も遊ぼうよ』

マナがそう提案すると、ユウナはいいよと返した。ハヤテももちろん、と返事する。

『じゃあ明日夜9時ね。みんなお疲れ』

『お疲れ様』

『おつ』

疾風は、ヘッドホンを外し、ふうと息を吐いた。ゲームを「閉じ」、パソコンの電源を切る。

明日（正確には今日だが）は七時から学校だ。冬休みなのにとかなんなこと思ってるのだが、部活の練習なのでしかたがない。疾風は剣道部に所属している。べつにそう強くはないが、楽しい。

あと二時間ほど寝れる。疾風は無言でベッドに入ると、眠りについた。

第一話？

「よお、疾風」

「あ、おはよう」

後ろから声をかけてきたのは、疾風の親友である、白^{しらはま}浜行人。百八十センチメートルはあろう長身で、体格もいい。しかし、顔はどちらかというところと柔和で、女子に人気がある……。らしい。本人がそう言っていた。ちなみに彼も、剣道部でしかも、全国レベルというんだから、すごい。

「そっぴやさ、疾風はたしかBCOやってたよな」

「うん、やってるけど……。ってあれ？言っただけ？てか、何でお前がBCOのこと知ってるんだ？」

疾風は首をかしげた。行人は基本的にゲームをしない。嫌いってわけではないそうなのだが、どうも苦手ということらしい。

「いや、それがさ。昨日、家帰ったらさ、兄貴がなんかパソコンでゲームしてたわけ。それで、なにやってるか訊いたらBCOだったんだよ。それでさ、お前もやってみないか？ていわれて、少ししたわけ」

「それで？」

「面白かった」

「はぁ……。？それでどうしたんだ？」

「ああ、今日買いに行こうと思うんだが、部活の後付き合えよ」

「別にいいけど………」

ふと見ると、校門が見えた。部活動の生徒がちらほら登校してきている。疾風たちも、校門を抜け、剣道場へといく。

「それでさ、おまえやるんだろ？初期クラスなんにするの？」

「クラス？クラスってなんだ？学校……？」

「バカ」

「バカって何だ、バカって」

まあ、たしかにゲームに疎い人間はいつてもわからないだろう。

「クラスっていうのは、職業のこと。例えば、ソルジャー剣士だったり、ウィザード魔法使いだったり、そういうやつ」

行人はなるほど、と頷いた。

「どんながあるんだ？」

行人は胴着を準備しながら、訊く。

BCOは本当にクラスが多く、正直全部説明するのはだるい。まあ、代表的なクラスだけでいいだろう。疾風も、胴着を身につけながら、説明をはじめた。

「んじゃ、一部だけ説明するよ。まず剣士^{ソルジャー}。基本的な剣を使うことができる。攻撃力守備力ともに、バランスがよくて、そこそ人気がある。

次に、ガンナー。その名のとおり、銃を扱えるクラスなんだけど、銃は難易度が高くて、挫折者が多い。でも、ガンナーはもともと俊敏度・・・・足が速くて、そこは役に立つかな。

そして、魔女^{ウィッチ}、魔法使い^{ウィザード}。女だったらウィッチ、男だったらウィザード。魔法に特化したクラスで、これは二番目ぐらいに人気が高いいかな。ああ、でもこれはレベルがだいぶ上がらないと取得できないから、最初から使える、ってわけじゃない」

ふんふんと、行人は真剣に聞いている。

「ほかには、俺も選んだ万能剣士^{ヴェサテリニソルジャー}。剣も魔法も両方とも使える人気クラス。でも、こいつはよく言えば万能、悪く言えば器用貧乏だから、最初のほう早くたつけど、後からは微妙かな」

「そうか」

ちょうどそこで、講師の先生が入ってきた。二人は急いで、ほかの部員とともに整列をした。

練習が始まると、ボーっと、打ち込みをしながらBCOのVRAC版のことを考えていた。早く、部活終わらないかなと、そんなことばかり考えていた。

「今日の練習はこれで終わりだ。では、連絡事項を言う。来週木曜日に、私立今泉川高校と練習試合を組んだ。詳しい時間は後日報告する。では、解散！」

「」「」「ありがとうございます」「」

挨拶が終わると、部員はそれぞれ胴着を脱ぎ、下校していった。

「はあ……。冬だったのに。胴着暑いなやっぱ」

「だな。そういや、お前昼飯どうする？」

「昼飯かぁ……。どっか適当にファーストフードでいいんじゃない？」

疾風はそういいながら、スポーツバッグを肩にかけた。

「そっか。まあ、まだ昼までには時間あるから先にＢＣＯ買いに行きたいんだけど、いいか？」

「べつにいいけど」

二人は学校を出ると、学校から一番近くにあるゲームショップに向かった。入り口すぐのところにＢＣＯの特設コーナーが設置されていた。

「これかぁ」

行人はＢＣＯのソフトを手にとり呟く。

「そういえばお前、今日身分証明書もってるか？」

「なんで？」

「いや、ＢＣＯ登録の時にいるから」

ＢＣＯの登録はめんどくさい。きちんと身分証明書を提示し、店で登録しなければいけない。

「まあ、生徒手帳なら」

「それでいいよ」

レジに向かう。レジには幸い客はいなかった。

行人はＢＣＯのパッケージをレジに出した。

「……………では、ご登録をしますので、身分証明書をお願いします」

行人はごそごそと、バッグの中から生徒手帳を取り出し、店員に渡した。

店員はなにやら、レジ横のパソコンに入力していく。

「はい、登録完了しました。こちらはお返しします。それと、これを」

店員は生徒手帳とともに、小さな紙片を渡した。

「これは？」

「はい、これは本登録用のIDとパスワードを書いた紙になります。ご自分のパソコンにBCOをインストールされて、起動するときに入力を求められるので、なくさないようにお持ち帰りください」

ありがとうございます、という言葉に背を受けながら、二人は店をでた。

「んで、どうする？昼飯いく？」

疾風がいうと、行人は首を振った。

「いや、俺の家に来いよ。昼飯は食わしてあげるからさ。BCOのこといろいろ手伝ってくれ」

それから、疾風は行人の家に行った。

行人の家はマンションの一室で、そこそこ広めの部屋だ。どうやら今日は誰もいないらしい。家の中は静寂に包まれていた。

「そつえば、お前の家に行くの初めてのよな気がする」

行人とは、中学一年からの付き合いだが、休日遊ぶと言ったって、どこかに出かけてばかりで、お互い、相手の家に入ったことがなかった。

「俺の部屋はこっち」

行人は自分の部屋へ案内した。

部屋に入ると、そこはなんとシンプルな部屋だった。
ほとんど何も無い。

あるものといえば、ベッド、勉強机、教科書類……その程度だ。マンガ本もなければ、趣味を匂わせるものすらない。高校生の部屋とはとうてい思えないほどだった。

「ほんと、何にもないな」

「だな」

行人は机の上においてあるパソコンを起動させた。最新型らしく、動作音が少しもしない。そのせいで、さらに静寂は深まる気がした。行人は買ってきたBCOの箱を乱暴に開けると、中に入っていた説明書と、CD-ROMを取り出した。

「このCDをパソコンに入ればいいんだよな」

疾風は無言で頷く。

パソコンが完全に起動すると、行人はさっそく、BCOのCD-ROMをパソコンに挿入した。

すると、デスクトップ上に自動でランチャーがあらわれインストール画面になる。

「そこ、そのインストールって言うボタンを押して」

行人はなれない手つきでマウスを操作し、押す。

インストールは始まったが、インストール残り時間の表示は二十一分。結構かかる。

「この間に、昼飯食うか」

「ん、そうするか」

昼食は結局、カップめんだった。はじめ行人は、「俺が作ってやる」とかいていたが、冷蔵庫を見るとほとんど何も入っておらず、入っているものといえば、納豆ぐらいだった。さすがに、納豆だけで料理できるわけもなく、昼食は戸棚においてあったカップめんになった。

カップめんを食べ終わった時、ちょうどインストールが完了していた。二十分もたっていないが、あれはあくまで予想時間なので、実際は早く終わったりする。

行人はさっそく、デスクトップ上に新しくできたBCOのアイコンをダブルクリックした。画面が一時、暗転する。

数秒たって、BGMがなり始めた。それとあわせるように、動画がだんだんフェードインしてくる。

「おお、すげえ」

はじめてこのゲームをした人は、たいてい、まずこのオープニングで驚く。ほとんど、アニメに近い。

オープニングが終わり、画面はログイン画面へと映った。

「ほら、そのフォームにさっきもらったIDとパスワードを入力して」

「おう」

行人のタイピングは早くはなかったが、何とか打ち込む。

- 仮ユーザー認証しました -
- 続きまして、本登録に移ってください -

続いて、画面はユーザー登録画面へと切り替わる。

「そこに、自分の好きなIDを入力して」

「IDかぁ。IDって名前だろ？どうしよっかな」

行人は五分ほど考えたのち、こう入力した。

- 死を誘うもの -

「・・・・・・・・・・なにそれ」

「いや、なんかかつこいいだろ？」

確かにカッコイイかもしれないが・・・・・・・・。とりあえずそれ以上はつつこまない。

「まあいいや。次はクラス選べよ。ほら、その六個から選べる」

「なるほどなあ・・・・・・・・。いろいろあるな・・・・・・・・」

行人は一つ一つのクラスの説明を見ていく。

「ま、俺はこいつかな」

そう言って選んだのは盗賊だシーフった。

「あ、シーフかあ。まあいいと思うよ。使える武器は少ないけど、アイテム集めに特化してるし、足も速いから。そこそこ使える」

「んで、次はつと・・・・・・・・。アバター選択・・・・・・・・？」

行人はどうやらアバターという言葉を知らないらしい。

「アバターっていうのは、ゲームの中の自分の姿とでもいえばいいかな。そこで作ったあバターで、ゲーム内では動く」

「なるほどね」

カチカチとキーボードを打つ音が響く。アバターの製作には十分もかかったが、まあそこそこましなアバターが完成した。現実の行人と同じ背の高いアバター。しかし、体格はどっちかというとすらつとしていて、ひよる長い体型になっていた。

アバターも完成したところで、ログインボタンを押す。
ログインするとすぐに、下にインフォメーションが出てきた。

- 初心者モードにしますか？ -

「あ、それNOでいいよ。俺が説明する」

行人は頷きNOボタンを押す。

「さ、それじゃまず訓練場で練習してみろよ。訓練場は、街に出て右側にある」

行人のアバター 「死を誘うもの」は自室から街へ出て、訓練場へとむかった。

「シーフは基本短剣をつかうから。短剣はリーチが短いから気をつけて。まずは、訓練場入り口で初心者ミッション？を受けるよ。クリアすれば、そこそこお金が手に入る。あ、ちなみにゲーム内通貨は^{ユグドラシルドル}Y\$だから。まあユグドラシルなんてまだ実装されてないのに、なんでそんな名前なのかは不明だけど」

「死を誘うもの」は、初心者ミッションを受け、訓練場へと入った。すると、目の前に二体のゴブリンが現れた。

「ほら、シーフは多数を相手するの苦手だから一体ずつ「釣つ」て・・・って、あ」

言った時にはすでに、ゴブリンに二体とも気付かれてしまっていた。
「死を誘うもの」は銅の短剣カッパーダガーを振るうが、当たらない。まだ、はじめたばかりのため、距離感覚がつかめていないのだ。そのまま、運が悪いことに、ただのゴブリンにふるぼっこにされ、「死を誘うもの」は倒れた。

「おい、しんだぞ。どうすりゃいいんだ」

疾風は頭をかかえた。初心者ミッション？で死ぬプレイヤーをはじめてみた気がする。

「ちよつと、なんか頭痛くなってきたから帰るわ」

疾風はそういうと、行人が後ろで何か言ってるのを無視して、部屋をでた。

「はあ、あれじゃだめだな。ま、一人で頑張れよ、つと」

それから、疾風は家まで一直線に帰った。

家に帰るとすぐにBCOを起動させ、レベル上げに向かった。

夜はまたユウナとマナといっしょにレベル上げをした。

その結果、ハヤテのレベルは200まで上がった。

次の日だった、ハヤテにゲーム内システムメッセージが届いたのは、
- あなたは、BCO、VRAC版ベータテストプレイヤーに選ばれました。つきましては、こちらのアドレスから、お申し込みください -

疾風は、その日嬉しさのあまり部屋の中で暴走し、顔面から盛大にこけ、鼻血が出たのはまた、別の話。

設定資料？？ モンスター・武器設定

〃〃モンスター図鑑（笑）〃〃

No.00A ゴールドゴブリン 種族/獣人/- 属性/- 弱点属性/- 弱点部位/-

パッシブ/逃走不可/自動防御？/ラ

ンダムAI？

ドロップアイテム/ゴールドなど

No.167 アンデットドラゴン 種族/アンデット/竜 属性/闇 弱点属性/光 弱点部位/頭

パッシブ/自動回復？

ドロップアイテム/-

No.198 ワイバーンキング 種族/竜/- 属性/火

弱点属性/- 弱点部位/翼

パッシブ/-

ドロップアイテム/-

〃〃武器図鑑〃〃

カーテナソード ランクSS 属性/相手の弱点に合わせて変化
固有スキル/カーテナラッシュ
カッパードガー ランクG 属性/I 固有スキル/-

〃〃魔法図鑑〃〃

パワーエンチャント ランクB 一定時間対象一人の物理攻撃力を

20%アップさせる。

レインコール ランクB 指定した場所の上空から集中的に
激しい雨を降らす。火属性の攻撃に当たると、一定確立で打ち消す
ことができる。確立は術者の水補正に比例する。

第二話「BCO・VRMMOAC」

疾風は朝早くから、ごそごそと出かける準備をしていた。今日は、待ちに待った、BCOのVRAC版のベータテストの日だ。

ベータテストは、東京にある、BCOを運営している会社の本社で行われる。ベータテストは、パソコン版のBCOのプレイヤーの中から、百人が抽選で選ばれ、その内審査に受かった人だけがすることが出来る。ベータテストは三日間にわたってとりおこなわれ、その間の宿泊施設は会社側が全額負担するという、出欠サービスぶりだ。

BCOのVRAC版の開発には一億円以上もかかったそうなのだが、そんなにサービスにしても大丈夫なのだろうか、と疾風は本気で心配する。

しかし、そんなことができるのはBCOの人气が故だ。

「こんなもんでいいかな……」

疾風は準備を終えると、昨日の夜に買った清涼飲料水を口に含んだ。自分の部屋にある小さな冷蔵庫に入れていたので、冷たい。爽やかな味が、のどを潤す。

今日から三日間のベータテスト。もちろん、親にはゲームのために三日も遠出する、なんてことは言えるはずもなく、行人の家に泊まる、とだけ言っておいた。行人本人には、昨日そのことを伝えた。口裏は合わせてくれるそうだ。しかも、行人の母親も協力してくれるとのこと。疾風本人は気づいていなかったが、どうも行人の母親

の中での疾風の評価は高いらしい。特に評価されるようなことをしたこともないので、そういわれたとき、つい首を傾げてしまった。まあ、親子そろって協力してくれるなら、今回のことは家族にばれないだろう。

疾風は軽く朝食を済ませると、用意していたバッグを持って家を出た。疾風は東京に住んでいるのだが、どっちかと言うと田舎のほうだ。BCOの本社がある、東京中心部までは、電車で少し時間がかかる。

最寄の駅は疾風の家から歩いて五分。自転車に乗るまでもないので、歩いて駅へと向かう。

冬休みとはいえ、朝なので通学や通勤のラッシュと鉢合わせてしまった、そのため、電車内は人が多く、ごったがえしていた。

振動、駆動音ともに少ないこの最新型の車両は、ドーナツ化減少が進む今、郊外と、中心部とをつなぐ、大切な役割を担っている。

電車に乗っている間、疾風はBCO、VRAC版のことばかりを考えていた。

実を言うと、BCOの抽選に当たったあと、百問ものアンケートをさせられた。質問のうち、三分の一はBCOに関する質問。そして、残りは個人的なことを聞いてくる質問だった。

たとえば、身長や体重、既往症や精神的疾患の有無などだ。

そんなことを聞いてくるのは、VR機器に少なからず人間への悪影響があるからだ。それは特に、精神面が弱っていると影響を受けや

すいらしい。そのため、事故を防ぐということも含め、このようにさまざまな質問があったのだ。

約三十分ほどで、目的の駅に着いた。

東京の中心部に位置するこの街。朝早くにもかかわらず、人は多く車の音が五月蠅かった。

疾風は、ポケットからメモ帳を取り出した。

そこには、BCOの本社ビルの住所がメモされている。

とはいえ……

「住所だけあっても、わかんねよなあ……」

いろいろ悩んだ挙句、ちょうど視界の範囲にあった交番に行くことにした。

交番にいた駐在さんは優しそうな若い男の人だった。

「へえ。ここにいくんだ。もしかして、BCOのベータテスト？」

駐在の口からは意外な言葉が出てきた。

「あ、えーっと。はい。なんで、しってるんですか？」

「いやいや。俺もBCOをやってるからね。別に駐在がゲームした

らいけないって法律はないでだろ？」

まあたしかにそうだ。

「ベータテスト行きたかったんだけどね。抽選落ちだよ。ちなみにこのビルは、その大通りをまっすぐ進んで、四つめの交差点を右に曲がって。そしたら、すぐわかるおもうから。わからなくなったらまたおいでよ」

「はい、ありがとうございます」

「ま、ベータテスト、俺の分も楽しんでこいよ」

疾風は軽くお辞儀をすると、交番を出た。

「三つ目の交差点をまがって、と」

曲がると、すぐ大きな建物が目に飛び込んできた。

疾風はそのビルの入り口に書かれている会社名を見る。

スノートライアングル株式会社。

BCOを運営している会社。

第二話？（前書き）

今回急いで更新したのでぐちゃぐちゃです。後日ゆっくり修正します。

第二話？

第二話？

入ると、そこはなかなか広いロビーだった。いたるところに、BCのポスターなどが張ってあった。ふと、受付の横に、紙が貼つてあるのが目に入った。

『^{ペー}テスト会場はこちら』

疾風はその紙の指示に従い、進むことにした。入り組んだ社内。張り紙がなかったら、迷ってしまいそうだ。

「ここ……か……」

たどりついたのは七階。

エレベーターの真正面にある、カウンターらしきところには『テスト受け付け』と書かれた張り紙がしてある。しかし、受付といつても、人は誰もいなかった。かわりにそこにあつたのは数台のパソコン。近寄ってみると、パソコンのデスクトップには、『テスト受け付け。』と表示されて、一つのアプリケーションが起動していた。

疾風はきよきよと辺りを見回す。誰かいないかと。しかし、人影は見当たらなかった。

そういえば、一昨日、マナやユウナと遊んだ時に、二人ともが抽選に当たったことを聞いた。今、ここには誰もいないが、またあとで会えるだろう。

そのアプリケーションには二つのフォームがあった。一つはBCOのIDを入力する欄。もう一つはBCOのパスワードを入れる欄。

疾風は、パソコンの前に置かれているイスに座ると、それらを素早く入力した。

- HAYATE | 0214 -
- **** *-

確定ボタンを押すと画面が変わった。

『ようこそ。BCOVRA C版 テストへ。これから、個人ルームへ案内いたします。係りの者が参りますのでそのままお待ちください。ID:012』

五分ほどそのまま待っていると、スーツを着た若い男の人がやってきた。首からは、BCO テストガイドとかかれたネームプレートを下げていた。

「こんにちわ。ようこそ、スノートライアングルへ。僕は、BCOベータテストガイドをしている、^{さかき}榊。よろしく」

榊は、そう言って、パソコンのほうを見た。

「えーっと、ID012か……」

榊は、脇にはさんで持っていたバインダーにはさんでいる紙を見る。どうやら、今日の参加者の名前が書かれているようだ。

「駿河疾風、くんでいいのかな？」

「はい」

「そうか。よろしくな。それじゃあ、今からいろいろ案内するから。まず、テストを受けてもらう前に、宿泊場所と、テスト場所、そのほかいろいろ場所覚えてもらうから」

「はあ……。えーと、テストはいつ始まるんですか？」

「ああ、テストは十時からだ。早くしたい気持ちもわかるけど、こっちも大切だから。それじゃあ、ついてきて」

そういうと、榊は施設の案内をはじめた。まず始めに行つたのは、ベータテスト会場。驚いたことに、会場は個室だった。榊が言うには、

「まあプライバシーの保護とかのためかな。ほら、オンラインゲームって正直なところを言うと、素性知れちゃうと、いろいろ困るでしょ？」

まあ一理ある。オンラインゲームにおいて、一緒に遊ぶプレイヤーのことなんて何もわからない。べつに知らなくてもいい。いや、むしろ知らないほうがいいだろう。

もちろん、あるプレイヤーと仲良くなり、それから聞くのならいいが、あくまで他プレイヤーは赤の他人だ。そんな人に個人情報教えるとなると、やはり心配になる。

個室の真ん中には人が一人入る大きさのカプセル状の機械がにおいて

あった。その中を見せてもらったが、中身はいかにも座りごころの良さそうな、背もたれの大きい一人用のソファーみたいなものだった。ここに座って、VRと接続するらしい。

次に行ったのは宿泊施設。少し離れた場所にあったそれは、なかなか大きなホテルだった。しかし、どうも気に入らない点が一つある。その場所はいわゆるアキバ。秋葉原だった。交通の便はいいのだが、
……、疾風はどうも、秋葉原に偏見を持っていた。

べつに、嫌いつてわけではない。べつに、そこがクラスで『おたく』が行くところとかいわれてるのも関係ない。むしろ、疾風自身、最近ゲームおたくになりかけてるなあ、とか実感してるのだから。

しかし、どうも近寄りがたい何かがあった。まあ、今回の三日でその認識は変わるかもしれないが……。

さいわい、ホテル自体は普通だったので（当たり前だが）問題はなかった。なぜか、東京の秋葉原にあるのに、温泉がどうか書いてあった。謎だ。

三番目に連れて行かれたのは、なんと、病院だった。

しかも、はじめの内科は普通として、二番目に行ったのが精神科。

抽選に当たったさい、アンケートをしたとはいえ、やはり会社側は、慎重に行きたいらしい。

まあそれもそうだろう。ベータテストの段階で事故でも起こしたら大変だ。

約二時間かかって各場所の確認が終わり、再びスノートライアングル本社に戻ってきた。

榊は疾風にテスト室に行っておいて、と言い残し、準備をするためかどこかへ行った。

疾風は部屋の隅にあつたソファーに座つた。ふと、横に目をやるとBCOVRA C版の説明書が置いてあつた。

分厚い説明書の表紙には、マジックで軽く目を通しておいて下さい、と書かれていた。疾風は、説明書を開く。

BCO事態の説明は見るまでもなかつたので飛ばした。そのほかには、新しく追加された機能や、VR状態での操作の仕方が書いてあつた。

VR。五年前に実用化された最新技術。この五年間の間、実用段階まで行っていたVR技術は、その実用の費用の高さゆえ、ほとんど製品化されなかつた。一時期、アミューズメントパークで実用化が試みられたが、費用を計算したところ半端ない額になつたので中止になつた。海外ならすでにVR機器を製品化しているのだが、不況の日本にはそんな余裕がなかつた。しかし、一年前スノートライアングル社が、VR技術を応用したゲームを作成していることを発表した。じつは、七年前からすでにその計画が秘密裏に進められていたという。そして、今回のベータテスト。

科学の発展はすさまじい。

疾風は説明書に一通り目を通すとポツリと呟いた。

「いよいよだな」

そう、いよいよだ。やっと、待ちに待った、憧れに憧れたVRMMOAC（仮想現実多人数参加型オンラインアーケード）が体験できる。

ボタン、とドアが開き、榊が入ってきた。

「やあ、待たせたな。説明書には目を通してくれたかな？」

「はい」

「そうか、なら今からベータテストをはじめようと思う」

「はい！」

疾風は輝くような表情で、ソファーから立ち上がった。

「じゃあ、そのカプセルの中へ入ってくれ」

榊が、カプセル横の小さなボタンを押すと、カプセルのふたが開いた。疾風はそこに入り、中のソファーに腰掛ける。

「じゃあ、その手を置くところがあるだろうそこに手を置いてくれ。そしたらあとは音声ガイドに従ってくれ」

「はいわかりました」

左右にある肘掛（？）に手を置く。すると、カプセルのふたが勝手に閉まり、手首辺りはゴム上のバンドで拘束された。

『BCOVRA C版ベータテストへようこそ。まずは、ヘッドギアを装着します。頭を動かさず、リラックスしてください』

ウィーンという音とともに、頭に何かがかぶさった。これがヘッドギアだろう。ヘッドギアとは、VRに接続するための必需品で、ここから様々な電気信号が脳へおくられ、逆に、脳神経からのからだへの接続を自動的に最小限へ設定。かわりにヘッドギアのほうへ接続される。

頭がぼんやりしてきた。

『それでは、接続コネクトをします。接続という単語を、思い浮かべてください』

(・・・接続コネクト)

刹那、ギューンと意識が暗闇に放り出される感覚に襲われた。接続が始まっている時の感覚なのらしい。説明書に書いてあった。

数秒後、疾風は暗闇の中へ一人佇んでいた。

「これがVRなのか・・・」

いや、たたずんでいるという表現はおかしいだろう。なぜなら、視界はあるが自分の体が見えなかったからだ。すこし戸惑っていると、空中に文字が現れた。それと同時に女性の声が聞こえてきた。しかし、それは合成音声だ。

『コネクト成功しました。これから、初期設定へと移ります。』

まずはログインをします。』

目の前に、透明なウィンドウが現れた。

ID: HAYATE | 0214

ユーザー名: ハヤテ

クラス: VSL

『以下の情報に間違いがなければ、YESを押してください。』

情報にはまちがいはないのだが、自分の体もないのにどうやって押せというのだろう。

悩んだあげく、もし自分の体があったらと、想像してからだを動かしてみることにした。

動く。

からだは見えないが確かに感覚はある。

ハヤテはそのままYESに触れた。

『認証成功しました。

続きましてアバター設定に移ります。』

どうやらBCOパソコン版の時のアバターは適用されないらしい。しかし、パソコン版のさいに適当にアバターを作り、後から帰らないことを知って嘆いていた疾風にとってはそれは願ってもないことだった。

『今回はベータテストとなっていますので、アバターはランダム選択となります。ほかのプレーヤーと被ることはないので心配はあり

ません』

ふと、変化がおきた。

自分の手が、足が体が見えた。シンプルな軽装備を着ている。その装備はBCOの初期装備であるビギナーシリーズと同じものだった。

『これがあなたのアバターです』

そう言うと、目の前に鏡が現れた。疾風は鏡越しに自分の顔を見る。

「ええええっええ！？これが俺！？」

そこに移っていた顔はどうも女の顔に見えた。いや、どちらかというとか中性的な顔というべきだろうか。

すらっとした顔に、大きな瞳。髪はショートヘアだが、女の子にももちろんショートヘアはいるので結局どっちとも取れる。

もともと、現実のハヤテの顔も中性的な顔だった。なんていうのだろうか。女子からはよく、「疾風くんて、かわいい系だよねー」といわれていた。余計なお世話なのだが。

しかし、今の顔は現実の時を優にこえる。

まあ、

「ブサイクよりはいいか……。って、ん？」

ハヤテは改めて自分の顔をじっと見た。

そういえば、パソコン版のBCOの時に使っていたアバターと似ている気がするのは気のせいだろうか。いや、気のせいではない。

ということは、このアバターはパソコン版のデータをもとに作られているのだろうか。

『そろそろお時間ですので、自室へ転送いたします。』

「え、あ、ちよっ
」

と、待って、という暇もなく、まわりの視界が暗転した。

第二話？

いきなりの転送でたどり着いた場所はちよつと広めの個室だった。
レポート
ベッドがあり、壁に寄せておいてある本棚には、様々な本が置かれている。そして、大きな箱がある。それはゲーム内で言う、「倉庫」だろう。

ここはあきらかに、パソコン版のBCOの自室と同じものだった。
VRに忠実に再現されている。

「これがマイルームってわけか……………！！？」

ハヤテは自分の発生した声に驚く。いつもの疾風が出している声とちがったからだ。いつもより声のトーンが高い。ちょうど、声変わりする前の男の子の声、と言ったところだろうか。ようするに、高い。

これも、プライバシーの保護のためだろうか。

「でもこれじゃあ、本当に女の子みたいだな……………」

ハヤテは少し違和感を感じながらも、これがVRの世界なんだなと実感する。

「あ、そうだ。メニュー。メニューウィンドウってどうやって出すんだっけ……………」

メニューウィンドウはゲームにおいて重要だ。例えば、武器、防具などを装備する、装備編集ウィンドウも、所持アイテムを整理する、

持ち物ウィンドウも全てメニューウィンドウを介しなければいけない。

ハヤテは何とかさつき見た説明書に書いてあった方法を思い出そうと試みる。

「たしか………、こうか？」

ハヤテは右手を勢いよく、斜め下に振り下ろす。すると、下の何もないところに手ごたえを感じた。ちょうど、さつき立体メニュー^{ホログラム}を触った時と同一の感触。

ハヤテの眼前に、半透明のホログラムのウィンドウが現れる。疾風はそれに触れ、メニュー^{ステータス}を操作する。まず、能力ウィンドウを開いた。

```
name: HAYATE
class: VST
lv: 0
経験値exp: 000 / 100
物理攻撃力str: 19
物理改心率dex: 17
物理防御力vit: 16
魔法攻撃力int: 17
魔法改心率con: 16
魔法防御力men: 16
```

完全に初期の数値だ。このゲームはレベル0からスタートする。パソコン版では現時点で最高レベルは三百だったが、さつき説明書を

見たところ、このベータテストでは二百が最高らしい。しかし、三日の内、少ないテスト時間で、二百はおろか、百まで上げることすら無理だろう。

ハヤテは一旦ステータスウィンドウを消し、次に装備ウィンドウを開いた。

武器：カッパーソード

指輪：ビギナーリング

頭：-

体：ビギナーベスト

手：-

足：ビギナーブーツ

アクセサリ：-

その他：-

「ん・・・・・・・・・・？」

一つ、気になる点があった。それは、装備ウィンドウの一番下、その他のという欄だ。パソコン版のときはそんな、曖昧な名前の欄はなかった。ようするに、アーケード版で実装されるシステムということだろう。なにが装備できるのかが楽しみだ。

ハヤテは全てのウィンドウを消した。

何をしようかと、ベッドに腰掛けた時、目の前に一人の少女が現れた。ハヤテは驚き、身をひく。しかし、次の瞬間には驚きよりも、興味のほうが強くなっていた。

とても長い髪で、頭のちょうど天辺には大きなリボンをつけていた。

かわいらしい顔つきで目を奪われる。

まあ、それにしてもいきなりだ。いきなり少女はあらわれた。どこから入ってきたのだろう……。と現実なことを考えている自分に気付き、苦笑する。そうだ、ここはゲームの世界だ。たいていのことは、それが非現実な事だとしても起きる。だって、この世界自体が非現実なのだから。

ハヤテは冷静になり、少女に話し掛けた。

「君は誰？」

少女は、淡々とした口調で、

「はい、私はこのBCOのガイド及び制御を行っております、エーアイ AI（人工知能）です。名前はそのまま、AIをローマ字読みして、「アイ」でいいです。普段は、実体はありませんが、今回はNPCノンプレイヤーキャラクターとして、存在させて頂いてます」

「はあ……………」

ハヤテは、アイの言葉にただ驚く。

彼女はNPCらしい。

見た目ではまったく分からなかった。ただの人間と変わらない。これがNPCとは思えなかった。

「君は本当にNPC？」

「はい、そうです」

しかも、普通のNPCとちがい、会話が成立している。ゲームのNPCというのは基本的に、パターンで話しているだけだ。しかし、アイはちがう。ちゃんと、話し相手の言葉を理解し、受け答えをしている。AIも進化しているということだろうか。

「ところで、何で君はここにきたんだ？」

「簡単なことです。私はガイドですから。あなたを連れ出しにと言ったら表現的におかしいですが、呼びにきました」

「なんのために………？」

「いまから、メインイベント00が始まります。場所は中央都市アーネンエルベのSS地区、中央広場です。内容としては主に、ゲームの説明、ベータテストの概要等です。全員強制参加ですので……。もし、ご自分でいかならない場合は強制転送となります。強制転送はペナルティが課せられるので……。ハヤテ様も、お早いうちに向かわれたほうがいいかと思います」

こんな子がけいをを使って話していると、違和感を感じる。それとはかく、いまハヤテのいる部屋はアイいわく、アーネンエルベの宿屋の一室だという。ちなみに、アーネンエルベという町の名前には聞き覚えがなかった。パソコン版のとき、最初の町の名前は違った。ようするに、今回の拠点がここ、というだけの話だが。

「そうだな……。んじゃ広場に早いとこ行こうかな」

ハヤテは再びメニュー画面を出す。今度はマップウィンドウ。ホログラムで忠実に再現されるアーネンエルベ。画面上に表示されている赤い点が自分。場所は、

『アーネンエルベA - 11112』

宿屋とはいえど、ビルのような形だった。おそらくA - 1が番地で、1112が部屋番号だろう。

「ねえ、アイ……ってあれ？」

マツプを消し、前を見ると、アイは既にいなくなっていた。役割を果たしたからいなくなったのだろうか。

ハヤテはそう決め付け、部屋からでた。

やはり、ビルのようなつくりの宿屋だった。どっちかというと、ホテルという表現のほうが近いかもしれない。

ハヤテの部屋は一階で、部屋を出てすぐのところになぜか自動販売機があった。ファンタジーの欠片もない機械。逆に、それが新鮮なものに見えるほど意外だった。VRの中で飲み食い……？ そんな矛盾に疑問をもつ。

そういえば、何かで見たが、VRのなかで飲み食いをすると、味も感じるし、満腹感も得られるという。しかし、それはあくまでヘッドギアから電気信号として伝えられたもので、現実ではない。そのせいで長時間VR内で『生活』していると、餓死の危険もあることが示唆されていたような気がする。

まあ、あとで買ってみよう。そんなことを思いながら、ハヤテは外へでた。

第二話？

そこは、なかなか綺麗な町だった。その町並みは何処か、ヨーロッパを思わせる。

ハヤテは、そんな町の細い道を走る。いまいるA 1地区から、S地区へは、走って五分といったところ。べつに、走らなくても十分間に合いそうなのだが、ハヤテはあえて走った。

それは、早く行って人探しをするためだ。

探すのはもちろん、マナとユウナ。

おそらく、二人のアバターも自分と同じようにパソコン版のときと似たものであるにちがいない。

ふと、目の前の視界が開ける。そこそこの広さの広場。中央には噴水があり、円状のその広場の円周上には、ベンチがいくつかあった。ここがSS地区『アーネンエルベ中央広場』だ。そこにはすでに、数人のプレーヤーがいた。それぞれ、ベンチに座ったり、数人が集まって話したりしていた。

ハヤテも広場に入り、二人を探す。

広場の端のほうに、少し背の低い空色の髪の少女がいた。一人ゆっくりと、ベンチに座っている。

「ユウナ・・・・・・・・・・？」

ハヤテは近寄り、話し掛ける。

ユウナは顔をあげ、ハヤテのほうを向く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・誰？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

第一声はそれだった。どうやらハヤテのことがわからないらしい。まあ、無理もないだろう。どう見ても、どう声を聞いても、女性プレイヤーに見えてしまう、ハヤテのアバターでは。

「俺だよ。ハヤテ。わからない？」

ハヤテは自分のプロフィール画面を表示させる。ユウナはそれをじっと見て、えっ、と驚きの声を上げた。

「ハヤテ・・・・・・・・？なんで、ハヤテって男なんじゃ・・・・・・・・」

「

と、ユウナはハヤテのプロフィール画面に書かれている『性別：男』という表示を見つける。

「女の子にしか見えないんだけど・・・・・・・・」

「だよね。やっぱそうだよね。俺も自分で思った。でも、アバターはほぼランダムだし。仕方ない」「

「まあ、そうだね。運いいのか悪いのかわかんないね」

運なんか、悪いに決まってる。

「ところで、マナ見かけなかった？」

「あ、ああ。俺も今探してるんだけど……………」

きよろきよろと辺りを見渡す。パソコン版でのマナのアバターは、黒の長い髪。そこそこの長身ですらった体型だった。

「まだ、きてないのか……………」

「ドーン！」

「うわっ!？」

いきなり、ハヤテは背中を手で押され、バランスを崩した。そのまま、顔面からレンガ張りの床に直撃。後ろでは笑い声が聞こえる。

「アハハハ。今ので転んじやう？普通。ころばないっしょ」

特に痛くもなかったが、ハヤテは自分の頬を手でさすりながら、起き上がった。そして、笑い声のするほうを振り向く。

そこにいたのは黒い長髪の、すらっとした少女。おそらく、マナだろう。マナはおなかを抱えて笑っていたが、その笑いはいつのまにかユウナにまで感染していた。

「アハハ。フフフフ。ハア。フウ……………よし、なおった。こんちゃ、ハヤテ、ユウナ」

「あー。やっぱりマナかぁ。いきなり、ハヤテを吹き飛ばすから誰かと思ったよぉ（笑）」

「てか、マナ。いきなりそんなことしなくてもいいじゃん……..
。いてえんだけど」

本当は痛くなかったが、ちよつとうそも混ぜてそういった。しかし、マナは、

「うそ。そんなに痛くなかったでしょ？だつて、このVR、痛覚接続だ**い**ぶ下**げ**てあるから」
「うぐぐ、」

マナはちゃんと知っていたようだ。

VR機器からの感覚信号は現実のものと同じだ。痛覚だつて例外ではない。ファンタジーの世界において、痛覚が通常と同じだけ伝わったら本当に死んでしまう。例えば、普通に剣を振り回して闘うし、モンスターは魔法を使ったりする。剣で刺されたとき、本当にさされたときと同じ感覚が伝われば、ショックで気絶してしまふかもしれない。

そんなことを防止するために、BCOでは、痛覚接続を約五パーセントにまで、下**げ**てある。これは、説明書にも書いてあったことだ。マナもしっかり説明書を読んでいたらしい。

「てことは、おまえそれ知**つ**ててわざとや**つ**たのか？」

「んーそうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

マナははぐらかすように笑いながら言った。

「あのなあ、おまえ……………」

ハヤテが言いかけたところでしか以上にシステムアラートの表示が出てきた。マナにも、ユウナにも同様に出てきている。

それは、メインクエスト発生という表示だった。

『こんにちは。みなさん。ようこそBondage Connect
Online VRAC^{ヴラック}版へ。』

どこからともなく聞こえてきたのは、さっきも聞いたAIの声だった。

『私は、このゲーム内のガイド及びメインシステムを制御しているAI^{エーアイ}です。そのまま、アイと呼んでください。さて、メインクエスト00を開始します。皆さん、上空にご注目ください』

見ると、いつのまにか広場にはたくさんのプレイヤーが集まっていた。全員がAIの指示どおり上を向く。

「なに？あれ」

「飛行船………？」

空には、大きな大きな飛行船が飛んでいた。飛行船には大きなディスプレイがついていた。そこにはAIの姿が映っている。

『メインクエスト00の説明をいたします。主に、ゲームの説明となっております。最後まで聞けば、1000Y\$^{ユグドランドドル}と、ポジション？を一つ差上げます。』

「1000か。まあ初期ならそこそこだね」

「そだねー」

「まあ、最後まで聞こう」

『では、説明をはじめます。ご存知の通り、本ゲームはVRを利用した世界初のゲームとなっております。このベータテストは、皆様にゲームを体験していただき、バグの発見および、意見を聞くためにとり行っています。』

簡単にゲームのシステム、ルールの説明をします。操作の方法は省きます。もし、操作の方法等わからないことがあれば、メインメニューより「ヘルプ」を参照ください。

ベータテストでは全ストーリーの内十パーセントのみ体験することが出来ます。最高レベルは二百です。システムは基本的にはパソコン版と同じです。剣、魔法を使い、仲間とともにマップ攻略をしてください。

今回新導入のシステムが三つあります」

「新システムだって。なんだろ……」

多分、ここにいる全員がそれを楽しみにしていただろう。ここにいるプレイヤーは中級者以上なので、ゲームシステムの説明は要らない。むしろ、その新しい要素が楽しみだ。

『まず一つ目は、信頼度です。信頼度は数値で表され、下は-50、上は+50の百段階となっています。初期は0となっています。現在の信頼度は、ステータス画面で確認できます。』

信頼度のくわしい内容については言うことができません。そのまま、言葉の意味から想像して頂いて結構です。数値はシステムのほうが自動的に判断し決定されます。

勘違いしないで頂きたいのは、+だからいいとか、-だから悪いとかというものはない、ということ。どちらにも数値が高くなるほどいいことがありますので』

信頼度……。そのままの意味でいいのだろうか。例えばパーティー内で仲間の信頼を得る行動をしたりしたら、あがるとか、そういうものだろう。

『続いて二つ目は、装備欄のその他です。そこに装備できるものは様々ですが詳しいことは、皆様で探してください。』

最後に三つ目は、カジノです』

「カジノ………?」

「カジノってあれだよ、ルーレットとかスロットとかそういうのでお金賭けてやるやつだよ。」

ユウナがハヤテに対して聞いてきた。ハヤテも詳しくカジノのことは知らないで、曖昧に頷いた。

『カジノはアーネンエルベC 0地区となります。では、いじょうで説明を終了します……。あ、すみません、一つ忘れてました』

その言葉に、ハヤテは小さく笑う。

AIが忘れてましたなんていうとは、おかしいな、と。結局はシステム上の言葉を再生してるだけなのに。まあ、その忘れてました、も含んで一つのセリフなんだろうが。

『それは、このゲームの体感時間のことです。現実での一分間は、

ゲーム内では二十分となります。それでは、メインクエスト00を終了します。報酬をお受け取りください』

AIがそういうと、報酬画面がぱつとあらわれる。プレイヤー達は、報酬画面にあるポーションを自分の持ち物ウィンドウへと移す。

「聞くのも結構疲れるね。それにしても、すごいね一分が二十分になるなんて」

「だね。まあ、たしかにこれならアーケードゲームでもそこそこできるってわけか」

「うんそうだな。アーケードなんて、長くても三十分ぐらいしかできないもんな。三十分でったら六百分分。六百分といえば、十時間か。なかなかだね」

「うんうん。時差ぼけみたいのもあるかもね」

マナは苦笑いをした。

「ところで、マナ、ハヤテ。このあとどうする？」

「このあとか……。とりあえず、ミッション受けに行こうよ」

「そうだな。ミッションは確か、宿屋でも受けられたはず……。ん。そっぴや、二人は宿屋どこ？」

聞かれ、二人は

「「A - 1だよ」」

「「えっ!？」」

と、みごとにはもった。

「ユウナもA - 1だったの？」

「マナもA - 1？」

二人は驚き、顔を見合わせる。

(ていうか、A - 1って……)

「ねえ、俺もA - 1なんだけど」

「「え、ハヤテも!？」」

「なーんだ、みんな一緒じゃん」

「ユウナもハヤテも一緒だなんて驚いたよ。じゃあ、みんなと一緒に宿屋に帰ろう」

「そうだね。あ、そうだ。あれ、使おうつと」

そっつい、ユウナは呪文らしきものを詠唱した。すると、体が急に軽くなった。

「これは？」

「あ、これ？新実装なんだけど、WIC^{ウィッチ}の初期スペル。スピードラニング。そのままの意味。足が速くなる。これで、戻るの早くなるでしょ？」

「そうだけど……。あれ？なんで、レベル0なのに、W^{ワイ}I^{イチ}C^チ？」

たしかに。W^{ワイ}I^{イチ}Cは百レベル以降で受けれる特殊なミッションを受けないと転職できなかったはず。

「えっとね。これパソコン版がそのまま引きつがれてるみたい。二人も、職選びできなかったでしょ？職はそのままで、レベルだけ0になってるみたい」

「なるほどね」

「じゃあ、いくよ？」

そう言うと、ユウナは走り出した。スピードランニングのおかげか、すさまじい早さだ。

「あ、ちよつとまってよ」

マナと、ハヤテも走る。

風を切り、人間として、ありえない速度で、道を駆け抜ける。

行きは五分かった道を今度は三分で戻ってきた。

「はえー。すげ。これがVRかぁ……………」

「ほら、勝手に感心してないでミッション受けようよ」

「あ、いや。その前にフレンド登録しなきゃパーティー組めないだろ。どうせ、Fパーティーを組むんだろ？経験値てきにも」

Fパーティーというのはフレンドパーティーの略だ。フレンド同士で組んだパーティーのことをさす。普通のパーティーとはちがい、様々なボーナスがつく。報酬が増えたり、経験値が増えたり、攻撃力も五パーセント増加する。

「そうだね。んじゃ、フレンド申請送るよ」

一番早く反応したのはユウナだった。ユウナはさっそく、フレンド申請の準備をしている。

「あれ、ユウナ、男には送らないんじゃないかなかったっけ？」

たしかに前もハヤテがフレンドになろうとしたときに、そんな理由で断られた。

「あー、でも、女の子っぽいからオーケー」

「・・・・・・・・」

そんな理由。ハヤテとしては、不愉快だったが、まあフレンドになつてくれるならありがたい。

三人はそれぞれフレンド申請を済ますと、宿屋の受付で、一番初めのチュートリアルミッションを受けた。いくら、中級プレイヤーと上級プレイヤーのパーティーとはいえ、VRでの戦闘は初めて。感覚を掴むためには、やはりチュートリアルミッションだろう。

「さあ、いこ？」

「ああ、」

「うん！」

三人は、チュートリアルミッションが行われる、アーネンエルベG地区。^{コロシウム}闘技場へと、向かった。

もちろん今回もスピードランニングを使って。

第三話

第三話 「チュートリアルミッション」

三人はコロシウムにたどり着くと、コロシアムの受付に行った。受付にはNPCはいた。相変わらず、普通の人間と変わらない容姿で、少し変な感じがする。

「すみませんが、ただいまチュートリアルミッションは三パーティー街です。訓練室で少々お待ちください。順番がきましたら、コールをして、無料で転移させていただきます」

どうやら、すでに三つものパーティーが来ていたらしい。どうやらチュートリアルミッションは一パーティーずつしか受けることができないらしく、待たされるはめになってしまった。

訓練室はそこそ広い部屋で、武器魔法の使用可能エリアだった。

「ここで少し練習するかな」

そう言つて、ハヤテは背中の中のホルダーにさしていた、剣を抜く。もちろん、初期装備の銅の剣だ。カッパーソード

「そうだね。敵は出てこないけど、一応感覚だけでも掴んだほうがいいよね。剣とか振り回す機会、現実ではないからね」

マナは苦笑いをしながら、細剣を取り出す。まあ、実際疾風は現実で剣道をやっていたので、竹刀なら振り回したことはある。しかも一回振ってはないが、真剣を持ったことがある。あれはずしつとし

て重かった。それに比べると、銅の剣は軽いほうといえる。

「ま、やっぱり軽いとはいえ両手で持ったほうが安定するのかな・・・」

ハヤテは両手で剣を持ち、軽く振るう。両手で持つとあまり激しい動きはできないが、太刀筋は安定する。

「うわあ。うまいじゃん。現実で、剣道でもしてた？」

鋭い勘でユウナは言い当てた。まさにその通り。

「よく分かったな。剣道やってたんだよ。ちょっとだけだけどね」

横では、マナが細剣を使っていた。見た目からしても、軽そうでどつちかというと、振り回すというより、付き攻撃のほうだろう。刃はあまり鋭そうではない。鋭いのは先端部分。

「軽いなあ。こんなに軽いもんなんだー。細剣は振りやすいけど、めんどくさそうだなあ。やっぱりさ、いくらパソ^向コン版で強くても、こつちじゃ身体能力とかも関係してくるよねー」

確かにそうだ。パソコンだと、キーボード（もしくはゲームパッド）を使って操作するだけでいい。練習さえすれば、うまくなる

しかし、VRだと、自分の身体能力も関係してくる。ファンタジー風に身体能力は、補正されるようなのだが、やはりもとの身体能力が高い人・・・または、疾風のように実経験が多いほうが、強いのではないだろうか・・・。

「まあ、私は魔法だから、あんまり関係ないかなあ。武器というのは初期ではもってなかったし。装備されてたのはこれ」

ユウナが取り出したのは、一冊の古びた本だった。

「それは？」

「ん、これ？魔法の呪文とかが書いてある本。覚えれば、別になくてもいいんだけど、最初はね。まあ、まだ二ページしかかかれてないけど」

どうやら、魔法を覚えることに、追加されていくらしい。覚えれば必要ないということは、魔法職においては、記憶力も大切になってくるようだ。

「ていうかさあ。初期の魔法が『スピードランニング移動力上昇』と、『ライトニング』ってどうよ。こんなんじゃないよ、たたかえないよ」

確かに、どちらも基本的にはサポートの魔法だ。移動力上昇は論外、ライトニングも攻撃力はあるが、それは微々たるものだ。いいことといえば、数パーセントの確率で、『麻痺』が付加されることぐらいだろうか。

ユウナが愚痴を言いながら、なぜか訓練室においてあった狸の信楽焼きに対してライトニングを使おうとした時、システムメッセージが聞こえてきた。

『大変お待たせいたしました。順番がきましたので、コロシウムに転送をいたします。転送が完了し次第、ミッションは開始されます。準備はよろしいでしょうか？』

三人は顔を見合わせて頷く。

『では、転送します。』

いきなり三人の足元が光りだした。青白い光。その光は次第に大きくなり、床に大きな魔法陣を形成した。刹那、魔法陣がフラッシュする。

「「「！！」」」

目もくらむような強い光。同時に体が浮くような感覚。

つぎ、目を開けるとどこか広い場所にいた。

「ここは………?」

「コロシウム………かな」

周りも見ると、自分たちがいる大きな場所を取り囲むように、観客席のようなものがある。ちょうど、野球の球場みたいだった。

システムアラート：ミッション「チュートリアルミッション」を開始します

目の前に、そんな文字が浮かび上がったと思うと、三人を取り囲むように、十数体のゴブリンがあらわれた。まず、その再現度に驚いた。VRの中身はグラフィックとっていいのかはわからないが、

緻密に細部まで細かく作り上げられたグラフィック。あきらかに、
現実には存在し得ない獣人^{モンスター}。

そのグラフィックに一度感動し、遅れてその数に驚く。

「ちょ、ちよつと。数多くない!？」

数えると、十七体もいた。ゴブリン達はまだ、こちらの様子を窺うように動かない。

「ちよつとこれはきついかもな」

いかにそれが一番弱^{ゴブリン}い敵だとしても、数が多ければ話は別だ。塵も積もれば山となる。ゴブリンも数があれば、正真正銘の強敵だ。

「まあ、冷静に行けばいけるよ」

マナが静かに言う。

「ユウナ、SDかけて」

「了解!」

ユウナは素早く呪文を詠唱。SDを自分を含めた三人にかける。

それと同時にゴブリンが解き放たれるように襲い掛かってきた。

「避けて!」

周囲に逃げ道はない。三人はそれぞれ飛んだ。VRにアシストされ、

現実の三倍ぐらいの跳躍。ゆうゆうと、ゴブリンの輪の外に抜け出る。

「ライトニング！」

ユウナが叫ぶと、ちょうどゴブリンたちの輪の中心にバチッと電撃波が飛ぶ。ゴブリンたちは一瞬、しびれたように怯んだが、再び襲い掛かる。

「やっぱり麻痺しないか」

ユウナは唇をかみながら、身をひく。

「私がライトニングで援護するから。二人ともよろしく！」

「オーケー」

「わかった」

マナとハヤテの二人は前に跳んだ。SDの効力で足が速くなっているため、ものすごいスピードでゴブリンの群れにつっこむ。

「うおおおお！」

横に一闪。五体のゴブリンが吹き飛ぶ。しかし、次のゴブリンが飛び掛る。

マナは細剣でゴブリンを攻撃するが、多数戦には向かず、苦戦している。

「だめ。これじゃラチがあかない。私も補助スキルがあるから、ハ

「ヤテ、任せたっ！」

「え、ちょっ。まっ」

そう言い、余所見をした瞬間、ゴブリンがものすごいストレートをハヤテに向かって打ち出した。

「ぐっ」

疾風は何とか倒れずにすんだが、態勢が完全に崩れた。さっき吹き飛ばしたゴブリンも一緒になって、十七体が同時に飛びつく。

「うわっ！」

思わず目をふさいでしまったが、次の瞬間、

「ライティングー！」

バチッとおあたりがフラッシュした。

目を開けると、まわりでゴブリンがもだえていた。どうやら『マヒ』しているようだ。

「ユウナ！？」

ハヤテはユウナのほうを向いた。ユウナは何も言わずに、ただ真剣に呪文を唱えている。そのたびに辺りがフラッシュし、ゴブリンのHPが削られる。

あきらかにさっきまでのライティングとは違った攻撃だった。どういうことだろう。

しかし、そんなことを考えている暇はない。せつかくいま、ゴブリンは麻痺しているのだ。

「セエイ！」

剣ふるい、ゴブリンたちをなぎ払っていく。

「後ろ！」

「っ！？」

ぱつと後ろを振り向く、そこには大型のゴブリンがいた。ゴブリンたちを束ねる、『ゴブリンチーフ』だ。ゴブリンはその大きな爪を持った手で、ハヤテを掴み上げた。

「グッ………。」

「ハヤテー！」

マナは叫び、ハヤテのほうへ、ゴブリンチーフのもとへ走った。剣を引き、思い切り、ゴブリンチーフの背中へとめがけて突き出す。

「ハアアアア！」

グシャリという肉を突き刺す音。ゴブリンは雄叫びを上げながら、倒れた。ハヤテは開放され、地面へとたたきつけられる。

「ウッ………。はあ、ハア………。あぶねえ。死ぬかと思った。VRとはいえ、こええ………。あんなのが間近にいると。すごく怖い」

ゴブリンチーフは、ポリゴンの欠片となって、四散していく。それ

と同時に残っていたゴブリンたちも、黒い霧となって消えていった。

「今のは………?」

ゴブリンとはいえ、ゴブリンチーフは確かランク3のモンスターだ。すくなくとも、低レベル層で一発で倒せるはずもないのだが……。

マナは剣をしまいながら、

「あれはね、一レベルで覚えるスキルの『アサシネイション』。なんていうかな。使用中に敵を見ると弱点が見えるんだ。弱点といっても、何個かポイントが出て、そのうち一個なんだけど、今回は運がよかったね」

「そんなこといったって、弱点ついた程度では死なな……」
「ま、わたしのエンチャントもあつたし」

ユウナはいつの間にかハヤテの隣にいた。

「BCOはさ、リアルタイムで経験値たまつて、レベルも上がるんじゃない? さっきハヤテがゴブリン7対ぐらい倒したところで実はもう、三レベルになつてるんだよ?」

「えっ?」

ハヤテは驚き、自分のステータスを確認する。……、確かに今はレベル4だった。

「エンチャント? は二レベルの呪文だし、それにたぶんマナは運がよかったんだよ」

「運・・・・・・・・・・？」

「こそ、運」

マナは頷きながら、ハヤテに説明した。

「アサシネーションのもう一つ的能力。弱点をうまく突き当てた時に約一パーセントの確率で、敵が即死するんだ。まあ、ランク3までの敵にしかきかないけどね。それにしても、本当運よかったよ」

そういうことか、とハヤテは納得する。

システムアラート：ミッションをクリアしました。クリアタイム；1：23。ミッションスコア：1412。報酬として1412Y\$を差し上げます

ヒュンという音がして、再び転送された。今度は、コロシウム入り口に。

「おわったねー！お金もだいぶたまったし武器とか買いに行こうよ」

ユウナは嬉しそうに飛び跳ねている。

「そうだね。武器やは確か・・・・・・・・・・B-19地区だったと思うよ」

「んじゃあ、行くか。つかれたし、歩いていこう」

三人はコロシウムを後にして、B - 19地区の武器屋へと歩き出した。

コロシアムの観客席では、二人のプレーヤーが、三人を見ていた。一人は西側に座っていた。あきらかに初期装備ではない、黒い外套に見を包んだ男。

もう一人は、男の真反対に座っていた。気弱そうな顔の少女。少女は、疾風をじつと見ていた。ハヤテがゴブリンチーフに首をつかまれ、もだえていると、少女ははーとため息をついた。

「やっぱり。へたれね」

少女はその顔と似合わないせりふを言うと、たちあがり、どこかへいった。

第四話

第四話「メインクエスト01：氷雪の怪鳥」

ベータ版のテストが開始されてから、現実時間で既に、五十分がたっていた。ゲーム内の時間で、約半日が経過していた。

ほとんどのプレイヤーは、だいぶVRでの操作に慣れ、さっそくフイールドランジョンでの、レベル上げを行っているパーティーもいくつがあった。

新しい装備を身につけたハヤテたち三人も、ランク1マップ「薄闇の森」で、レベル上げを行っていた。

「セイツ！」

ハヤテの剣を振る様も、なかなかよくなってきた。マナは、ハヤテと比べ、まだまだ上手ではないが、確実に敵を倒していく。ユウナは、その職自体が今のレベル帯だと、戦闘に向いてないので、専ら二人の支援だ。

ハヤテたちの周りを取り囲むように白い光が一瞬フラッシュし、レベルが上がったことがわかる。

「ふう。やっと10レベルかあ」

「だね。レベル10まで半日かかるとは思ってもなかったよ」

空は、茜色に染まり始めていた。ゲーム内では、まもなく夜になる。

「普通のゲームだと、敵一体に、何秒かしかかからないけど、VRだとそうはいかないね」

モンスターたちの動き自体、現実の生き物を元にして、成功に作られている。さらにその、AIは、緻密に組まれ、なかなか手間がかかる。

ふと、前方に、開けた場所が見えた。いままで、薄暗い森の中だったが、そこだけ木がなく、紅い光が差し込んでいる。

「ここは………?」

範囲的には狭かった。まるで秘密基地のようなそれは、森の中から隔絶された場所のように思えた。

「あ、ホラみて！あそこ！」

ユウナが叫び、ふたりは指差す方向を見る。

「あ、あれ」

「うわっ！すごい！」

指差した方向の木の根元には、十輪ほど花が咲いていた。もともと白いその花弁は今、夕明かりに染められ、オレンジ色に光っていた。

「あれって、名前忘れたけど、結構レアアイテムだったよね」

「うん。確か名前は………、ハウルハートフラワーだったか」

な。向こうでは一輪1MY\$で取引されてたね」

ホウルハートフラワーとは、ポーションEXの合成にも必要な貴重な素材。そのほかにも、様々な装備の強化の際に使用すると、いい効果を得られる。しかし、その効果の反面、希少価値がとても高く、生えている場所はランダムで変わり、一度採取すると、同じ場所には二度と生えない。

「これ、とつとつこうよ。あとから使えるじゃん。使わないとしてもさ、最悪売ればいいよね」

「そうだな。んじゃ、三人で分けて採ろう。一、二、三、……ん、ちょうど十五本あるな。五本ずつ」

ふと、気配を感じた。

「誰だっ！」

ハヤテはばつ、と振り向く。

しかし、そこには誰もいない。ただ、暮れなずむ森があるだけ。

「おかしいな。確かに気配を感じただけど………」

「VRって、気配も感じれるの？」

「さあ、わからないけど、感じた気がする。誰かこれを狙ってるかもしれないから、急いで採ろう」

三人は手分けして、ホウルハートフラワーを採ると、採集ボックス

に入れた。

「じゃあ、そろそろ戻る？」

マナがそう言つて、空を見上げる。日は、刻々と落ちている。

「だな、ユウナ。スピードランニングよろしく」

「オーケー」

森には、夜が降りようとしていた。日が落ちるスピードが意外にも早い。ハヤテたいがいたのは森の最深部に近い場所。森を抜けるのにはなかなか時間がかかる。

途中で、何体かのゴブリンに遭遇したが、ほとんどを無視して駆ける。こんなに急ぐのはわけがある。夜。森のステージにおいて、夜は危険だ。第一に、光がなく周りが見えない。第二に、敵モンスターが夜型のものになる。パソコン版の経験から言っても、夜に出てくるのは、手ごわいモンスターが多い。光属性の魔法や武器があれば、大半は闇属性なので楽なのだが、初期では光の魔法は手に入らない。何とか夜になる前に抜けてしまう必要があった。

森を、完全に抜けた時には既に辺りは真っ暗だった。アーネンエルベの街は、灯りがともり、綺麗だった。

「ふう、やっと戻ってきたね。疲れたよ」

「だってさ、ここからさっきいた場所まで、現実換算で二十キロメートルだよ。アシストがなかったらやっていけないって……」

「

三人はそれから、ユウナの部屋に向かうことにした。ユウナの部屋は、ハヤテの部屋の真上だった。部屋手の部屋より、いくらか大きいような気がするのには気のせいだろうか。

「今日は本当、疲れたね」

ユウナはベッドにゴロンと転がり込む。

「今日は、って言っても、現実ではまだ一時間ぐらいしか経ってないんだけどね」

「むう。確かに。本当にこっちにいると、時間感覚ずれちゃうよ」

「なあ、今日採ったホウルハートフラワーは倉庫に入れとこうぜ？倉庫には確かかぎかけれたし、手持ちよりは安全だろ」

「そうだね。全部ここに入れていっていいよ」

ユウナはベッドから飛び起き、倉庫を開ける。三人の持ってた鼻をすべてそこにおさめ、ユウナがパスワードをかけてロックした。

と、ちょうどその時。

ピー。メインクエストが発生しました。

視界に、クエストウィンドウが現れる。

『皆さんこんばんわ。AIです。メインクエストが発生しました。メインクエスト01：「氷雪の怪鳥」。最近、夜になるとこの付近

の万年雪の山で、怪鳥が現れ、その山周辺の村人に被害が起きています。プレーヤーの皆さんは、アーネンエルベから西に向かったところにある山の、エアレーズングという街で情報を集め、怪鳥の討伐を行ってください。このクエストは期間付きです。期間は二夜。二夜以内に、討伐が完了しますと、全員に報酬が入ります。また、討伐をしたパーティーには特別な報酬があります。エアレーズングの街には、アーネンエルベD-8地区の共用ポータルより、テレポータルできます。共用ポータルは通常、5000Y\$がかかりますが、今回のクエスト中は無料となります。それでは、ご健闘を祈ります」

クエストウィンドウが勝手に閉じ、かわりに目の前にはひらひらと、二枚の紙が落ちてきた。

「なんだ？これ……」

手にとると、それには「共用ポータル無料券」とかかっていた。

「これ使えば無料なんだ。なるほどね」

「ねえねえ、マナ、ハヤテ。さっそく行かない？早く行って狩って、『特別な報酬』もらっちゃおうよ」

ユウナはせかすように、二人のほうを見る。

「あ、でも、その前に防寒服買っておいたほうがよくない？」

「そうだな。雪降ってんだろ、そこ。防寒服ないと、きついかもな。この世界、ちゃんと温度も感じるし、凍え死んじゃうかもよ？」

「あ、そうかー。んっじゃ、防具屋にまず行こう？」

三人はユウナの部屋を出ると、D・5地区にある、防具屋へと向かった。店に、客は二人しかいなかった。みんな、さっきのアラートを聞いて、出かけてしまったのだろうか。先を越されなければいいな、とハヤテは思いながら、防寒服を手にとる。

もちろん、防寒服といっても、戦闘時に動きやすいようなもの。

ユウナもマナも同じものを手にとる。最初のほうのレベル帯では、防具にほとんどバリエーションがない。あるといえば、多少の色のちがいでいい。しかもこの防寒服は白の一色しかなかったので、みんなおそろいだ。

ユウナとマナが先にNPCのいるカウンターで支払いを済ませ、ハヤテが後に続き服をレジに出そうとした時、ふいに肩をたたかれた。

誰かと思い、後ろを向くと、いたのは男女の二人組み。女のほうはメガネをかけていた。二十歳ぐらいだろうか。アバターだから年齢はなんともいえない。軽防具を身につけ、腰に剣をさしているところから見ると、どうやら剣士のようなのだ。

もう一人、女の人の後ろに隠れるようにいた男……男の子は、気弱そうな顔立ちで、どっちかというと、ハヤテ同様、女性よりの顔。服装からは職はわからなかった。

「あの、なんですか？」

ハヤテが聞くと、女のほうが口を開いた。

「あ、いきなりすみません。あのあなた達はこれから、エアレーズ

ングに行くんですね？」

丁寧に聞き取りやすい、ニュースキャスターのようなしゃべり方でも、どこか柔らかさを帯びたその声は、心地よく耳に響いた。

「あ、はい。そうですよ。それがなにか？」

「いえ、わたし達も行くと思ったんですが、わたし達、知り合いがお互いしかいなかったんで、パーティーが組めなかったんですよ。二人でしか。二人じゃ、メインクエストなんて、心配なんで……・……、できたらパーティーに入れてもらえないかと……・……」

ハヤテ、マナとユウナに目で問い掛ける。二人とも、べつにいいんじゃない？と返す。

「あ、大丈夫ですよ。パーティー組むならついでにフレンド登録もしときましようよ。Fパーティーが組めますし」

ハヤテが言うと、女は嬉しそうに手を合わせ、

「本当ですか！嬉しいです！わたしの名前はリサといます。職は剣士です。よろしく願います。あ、そしてこっちが、」

そう言つて、リサは後ろに隠れるようにいた男の子を前に出す。男の子は困ったような表情になり、どうしたらいいのか分からなくなつたのか、顔を下げた。

「すみませんね。現実のことはあんまり言ったらいけないって言われてるんですが……・……、これわたしの弟なんです。ジュンっていいです。職はヒーラーです。人見知りなんですが……・……仲良くしてやってください」

ジューンは軽くお辞儀をした。

しかし、顔がどうも幼く見える。VRという世界上、十五歳以上なのだろうが、どうもそうは見えなかった。まあ、気にしないことにしておく。

「俺の名前はハヤテっていいいます、職はVSTです」

続いて、マナとユウナも自己紹介をする。

「わたしの名前はマナ。職はSDM。よろしくね」

「わたしはユウナ。WICだよ。よろしく」

「よろしくお願いします」

リサは丁寧に頭を下げた。

ハヤテは会計を済ませると、全員のほうに向き直った。

「じゃあ、さっそく行きますか!」

「うん!」

「がんばろ!」

「はい、行きましょう」

「……………」

ジューンも何かは言おうとしたらしいが声は出なかった。

五人は店を出ると、共用ポータルへと向かった。

第四話？

「ここがエアレーズングの街・・・・・・・・・・・・・・・・」

暗闇の中、街灯りに照らされた雪の道。元は石畳なのだろうが、今は雪が五センチほど積もっている。

「結構寒いですね」

リサはハアーと、白い息をはいた。

正確にはわからないが、おそらく気温はゼロ度をゆうに下回っているのではないだろうか。防寒具を着ていなかったら凍え死んでいたことだろう。

「さて、どうしようか。まず情報を集める？^{アイ} A I もそう言ってたし」

「そうだね。マナのいう通り。手分けして情報集めようよ。夜は遅いけど、NPCだから大丈夫でしょ」

「だな」

「じゃあ、わたしはジュンと一緒に北のほうへ行きます」

「んじゃ、わたし達は・・・・・・・・、向こうの家のほうに行こうよ」

「そうだね」

「じゃあ、ハヤテはその教会ヨロシクネ」

そう言い残して、四人はそれぞれ行ってしまった。

一人残されたハヤテ。小さくため息をつき、振り向く。

ポータルのすぐ後ろ。そこには、大きな教会があつた。灯りが下のほうから照らしているせいか、とても無気味に見える。教会の窓からは、光がこぼれていた。どうやら、中には人がいるようだ。

ハヤテはゆつくりと教会のドアを開けた。ビューツ、と風が吹き抜ける。

教会には数人の人がいた。おそらくは普通の洋服を身につけているので全員NPCだろう。イスに座り拝んでいる(?) ようだった。

ハヤテは入り口から一番近いところにいた男に声をかけた。

「そうそう。最近なたまに、夜になるとどこからともなく獣の叫び声が聞こえるようになったんだ。でな、朝起きると、どこか家が壊れてる。まるで、爪で抉られたようにな。まだ、人間へは被害でてねえけどな、いつ出るか心配だ。本当に怖いよ」

「それで……………、その怪物というのを見たことは……………？」

「ああ、俺はねえよ。でもな、街のセラフィーっていう若い女が姿を見たそうだ。俺は本人から聞いてないから知らないけどな。一度会ってみろよ。街の一番外れ東の森の近くに住んでるからな」

「はい、ありがとうございました」

「いやいや、いいってことよ」

NPCと会話　　という、なんだか違和感のある会話を終えると、疾風は後二、三人に声をかけた。

「ああ、夜の怪物でしょう？　なんだかうわさによると、でっかい鳥だそうですね？」

「僕、最近この街に来たばかりなんだ。でも、なんか変なのがい
るみたいだし……。また引越そうかな……。」「
ZZZZZZZZZZ……。」「」

「まあ、こんなところかな」

ハヤテは教会から出ると、辺りを見回した。まだ、四人は戻って
きてないようだった。さっきいた、セラフィーという人のところ
に行くのは、みんなが戻ってきてからのほうがいだろう。

それにしても、

「やっぱVRって不思議だな……。」「」

現実ふつつと同じように感じて、現実ふつつとおなじように動ける。

でもこれは、現実ではない。ヴァーチャル仮想なのだ。やはりそこにまだ、違和
感を感じてしまう……。気にしすぎだろうか……。と
ハヤテは小さく首をかしげる。

「おいハヤテ」

ふと見ると、マナとユウナが帰ってきた。ほぼ同時に、リサとジュンも戻ってきた。

全員がそれぞれの聞いてきた情報を言い合う。しかし、たいていどれれも似通ったものだった。一番有力そうな情報は結局ハヤテのもだった。

「それで、そのセラフィーって人はどこに住んでるの？」

「ああ、えーと、たしか、東の街外れの森の近くだそうだ」

「なるほど。じゃあ、そこに行きましょうか」

五人はさっそく、セラフィーが住んでいるらしい、東の街外れへ向かった。

「：すみませんがこのページ本当はセラフィーと話す後までにするつもりだったんですが、ちょっと時間の関係でここまでにして、続きは次のページへ移します：」

第四話 ？

森は暗かった。

当然の如く森には明かりは無い。ところどころ差し込む月光が、唯一足元を照らす光だった。

三十分ぐらい歩いただろうか。前方に小さな家が見えた。

「あ、あれじゃない？そのセラフィーって人の家」

「ああ、だろうな。てか、これじゃもう、森の近くじゃなくて森の中だよな・・・」

その家は木で作られたログハウスのようなものだった。

いくつか窓はあるが、そのいずれも閉まっていて、部屋の中は明かりが灯っている様子も無い。寝ているのだろうか。BCO内の時間は直、深夜0時を回ろうとしている。たしかに、人なら寝ていてもおかしくない時間なのだが、NPCが寝るっていうのも・・・なんだかおかしい。

ハヤテは玄関の扉をノックした。

「すみません。誰かいますか・・・？」

反応は無い。

「おい」

さらに強く叩く。すると、いきなりドアが開いた。うち開きではなく、外開きだったため扉が思いつきり疾風の顔面に直撃した。しかもなぜかドアに当たり判定があった。微妙な量のHPが削られる。

ハヤテが顔を抑え悶絶していると家の中からのんきな声……..
いや、眠たそうな声が聞こえてきた。

「ふわぁーい。だれですかぁ？むにゃ……」

目をごしごしとこすりながらあらわれたのは小さな女の子だった。しかし、

「わぁ、エルフ族だ」

「ほんとだ、はじめて見た！」

ユウナとマナが思わず声を上げた。

その子の耳は先がとんがっていて、背中には薄く透き通った可愛い羽が生えていた。

「えるふ……ひゃい。えりゅふですよ〜。むにゃむにゃ」

今にも眠ってしまいそうな声。こっちまでもが眠たくなりそうだ。

やっと、ドアの反動のダメージから回復したハヤテはエルフの女の子に聞いた。

「君がセラフィー？」

すると、さっきまで眠たそうだった彼女はいきなり大きな声で

「はい！わたしがセラフィーです！なにかようじですかー？」

どうやら、名前を呼ばれて目が覚めたようだ。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「なんですー？」

目は覚めてみたいのだが、のんきな口調は変わらない。なんだか、調子が狂う。

「・・・、えーと最近この付近で何か無かったか？」

「何か・・・ですかー？えーと、そうですねー。あ！です。です。ありましたー」

「なに？」

「はいー。スノーウルフの喧嘩ですー」

「へ？喧嘩・・・？」

スノーウルフとは、雪原地帯のマップにしか出現しない固有種族で稀に、雪山から降りてきて、こういう場所にも来るといふ。凶暴な性格で人を襲う事もあるらしいが・・・今回のクエストとは関係の無いような気がする。

「多分・・・それじゃないよ。えーと、」

「最近たまに、夜になるとどこからともなく獣の叫び声が聞こえる

ようになった、って聞いたんだけど、その獣の正体をあなたみてない？」

ハヤテじゃなかなか伝わらずに、代わりにマナが訊いた。

「ああ、そのことですー？ハイ、見ましたよ。あれはグリフォンですねー」

「……グリフォン……？」

ジュン以外の四人は同時に首をかしげる。

別に、グリフォンを知らないというわけではない。

ただ、ありえない。

グリフォンというのは、獅子の体に鳥の顔という伝説の動物。グリフォンは通常、雪山の頂上で暮らしている。絶対にこんな場所まで降りてくる事は無いのだ。

「それ、本当なの？」

「ですよ。見間違える事なんてありません！……あ、ほらあれですよ」

セラフィーはハヤテたちの後ろを指差す。

あれって……

五人はゆっくりと後ろを向く。

「おい、おい、『冗談だろ・・・』」

居た。

その姿はあきらかにグリフォン。

大きさは差ほどでもないが、凶暴なグリフォンに違いは無い。

グリフォンは雄たけびを上げる。超音波のように高い音が耳につく。

ハヤテたちはとっさに耳をふさぐ。

「こ。。これ、やばい、動けないぞ・・・」

「あの雄たけび、麻痺作用もあるみたい・・・・・・・・」

「誰か麻痺治し持っていないんですか？」

「持つてるわけ無いよ、だってあれまだ手に入るようなアイテムじゃないもん」

「じゃあ、ここで一旦死ねと」

「そういうことだね、諦めようよ」

グリフォンは動けなくなったハヤテたちに向かって突進をする。

（　　っく）

攻撃が当たる寸前、急にハヤテの意識は引き剥がされるように闇の中へと解けていった。

設定資料？

BCO クラス 職紹介1

ヴェサテリニールジャー（VSL）通称：ソルジャー 和名：万能剣士

剣などの武器から、中級の魔法まで使いこなす万能剣士。様々な種類の技を使用でき、初心者に人気があるが、逆に突出した能力が無いため中盤以降で使いこなすのは厳しい。

（能力値は上から順にSS、S、A、B、C、Dの6段階評価）

体力：A

MP：B

俊敏度：B

物理攻撃力：A

物理会心：C

物理防御：B

魔法攻撃力：B

魔法会心：C

魔法防御：B

ヒーラー（HER） 和名：回復師

キャラクターの体力やMPの回復をする、回復のエキスパート。しかし、本人自身は防御力が低く打たれ弱い。レベルが上がれば、状態異常を直すことの出来るスキルも覚える。

体力：D

MP：SS

俊敏度：C

物理攻撃力：C

物理会心：C

物理防御：D

魔法攻撃力：B

魔法会心：A

魔法防御：C

ソードマスター（SDM） 和名：

あまたの種類の剣を使いこなす、剣のエキスパート。俊敏度、物理会心が高く、一気に攻め込み勝つ。また、能力強化の低級魔法も扱える。

体力：B

MP：B

俊敏度：S

物理攻撃力：A

物理会心：SS

物理防御：B

魔法攻撃力：C

魔法会心：C

魔法防御：B

ウィッチ/ウィザード（WIC/WIZ） 和名：魔女/魔法使い

魔法を主として戦う。武器の扱いは苦手だが、魔法の攻撃力で十分カバーしている。このクラスは特殊クラスで一定の条件を踏まないと転職できない。

体力：C
MP：SS
俊敏度：C
物理攻撃力：D
物理会心：D
物理防御：D
魔法攻撃力：SS
魔法会心：S
魔法防御：C

第5話 ？

暗闇。

どこを見てもただの黒。上も下も左右すらも分からない変な空間。そんな空間にハヤテは浮いていた。

S y s t e m A l e r t

目の前に、赤い文字が浮かび上がる。それで、ようやくここがVR空間の中だということに気付いた。

システムに重大なバグ（障害の事）が発生したため、BCOを強制終了します

そうか、バグか。

ハヤテは納得した。今ハヤテがプレイしていたBCOがベータ版。要するに、お試し版という奴だ。開発途中であり、こういったバグが起きるのも当然だ。

VRの神経接続及び、シャットダウンを開始します

再び意識が薄れていく。

・・・

目が覚めた時には、疾風はベッドの上で寝ていた。上体を起こし、

辺りを見回す。すると、榊の顔が目に入った。

「だいじょうぶかい？すまないね。システムにバグが発生してVRを強制終了したんだ」

「そうですか……。バグって、何が起きたんですか」

「いや、それは今調査中だ。おそらく、大分かかるだろう。本日のテストはこれで終わりということになるかもしれない」

「そんな……」

と、疾風は立ち上がろうとする。しかし、体が上手く動かず倒れてしまった。

「VR酔いだよ。VRに慣れてない人には、よく起きる事だ。十分に体を休めてくれ。それと、」

榊は疾風に一枚のチケットのようなものを手渡す。

「これは？」

「ああ、これはレストランの無料券。この近くに、レストランがあるんだが、今回のテストを受けている人は無料で食べられるんだよ。期間中なら何回でも使えるから、是非使ってくれ。ああ、でも、別に強制じゃあないから、他の店に入ってもいいし、コンビニで買ってもらってもかまわない」

「そうなんですか。ありがとうございます」

「いやいや、こちらこそ」

榊はそう言っと、体調が戻ったらホテルの方で自由にしてくれ、
と言い残して部屋を出て行った。

第5話 ？ （後書き）

今回はとても短いですが、気にしないで下さい。第6話から本格的に話が動くんで^^・そこから長くなると思います。

第5話？

結局、あれから疾風はやることも無く、ホテルの用意された自室へ戻ってきていた。部屋には、パソコンも備え付けられており、BCOも出来るという事だが、やらないことにした。せつかく、VR版をやっているのだから、そっちを考える事に専念したい。

今回はバグの所為で全然プレイが出来なかった。しかし、収穫は色々あったし、楽しめた。

まず、VR内では体が軽いという事が分かった。筋力とかもいつもと違う気がするし、システム上でアシストしているのだろう。とはいっても、剣を振り回したりするのはやはり本人。いくら、PC版で上級者といえる人でも、すぐ使いこなすのはまず無理だろう。おそらく、テスト時間内でも慣れることの出来ない人もいるはずだ。

さいわい、疾風は剣道をやっている。いくら、竹刀を振り回すのと剣を振り回すのでは違うとはいえ、経験がない人よりはいいはずだ。

マナとユウナはどうだろう。ユウナはWIC^{ウィッチ}だからともかく、マナは剣を振り回さなくてはいけなくはないはず。最初やったチュートリアルミッションを見た限りでは、問題はなさそうだ。

疾風はベッドの上に横になった。

今は正午。VR内では半日ぐらい時間が進んでいたが、実際ではほとんど進んでいないことに違和感を感じる。これじゃあ、製品化したときに『時差ぼけ』とかも起きるだろうな、とかどうでもいいこ

とを考えながら疾風はなにをするわけでも無くただ天井を見続ける。

ふいに、お腹がなった。

そういえば、朝ごはんは適当にしか食べていなかった。でも、BC
O中はじつとカプセルの中にいたのに、何故お腹が減るのだろうか。
やはり、VR内で動くと疲れるということか……。

疾風はベッドから飛び起きた。

「……、コンビニでも行こうかな」

一応、お金はそこそこ持ってきている。レストランの無料券もある
が……、昼からレストランで食べるような気はしなかった。

「夜はレストランで良いかな」

コンビニには確か、このホテルのすぐ近くに一軒あったはずだ。そう
だ、ついでに古本屋かゲームショップか何かを探して、暇つぶしで
しよう。

疾風はそう思いながら、部屋を出た。

第5話 ？

1 / 2

「ねえ、ちよつといい？」

ホテルを出てすぐ、後ろから呼び止められた。

そこにいたのは自分と同じくらいの歳の少女。ふと、疾風はこの少女を見た事があるような気がした。しかし、どこで見たか、誰なのかはわからない。

長く、さらさらとしたきれいな黒い髪。疾風には女子の服装の事はよく分からないが、それが流行のものだという事だけは分かった。

「えっと……誰？」

「私？私は早川真波^{はやかわ まなみ}っていうの。ま、そんなことどうでもいいじゃん？　ところで、君、BCOのテスト参加者なんでしょ？」

「そうだけど……」

他に、考えられないと思う。なにせ、このホテル（ボロ）はBCOテストの参加者の貸切なのだ。入り口に堂々と書いてあった。

「あなた名前は？」

「え、ああ……。駿河疾風だけど……」

言っと、真波はやっぱり、と声を上げた。

「ほら、ほら。私。わからない?」

彼女は、自分の顔を指さす。

口ぶりからして、どうも知り合いのようだが…、疾風には思い当たる人物がいない。 ん? 真波……?

まな…、み。BCO……。

「え! もしかして、マナ?」

「ご名答!」

真波は嬉しそうに手を合わせる。

「さつき、君が部屋出てくるときに私もちょうど部屋でたんだよね。部屋真横なんだよ? それで顔見たら、BCOでよく見かける顔に似てたから。君って、BCOのアバターにそっくりだね」

いや、逆だろ。

「そつか。君が、あのマナかぁ。まあ、そっちも結構にてるんじゃない? 髪型とかはね」

「そうかな」

「うん。えーっと、そつだ。早川さん…、なんて呼べばいいかな?」

「うーん。マナでいいよ。そっちの方が慣れてるでしょ? こっち

もしつくりくるからさ」

「ところで、マナは何で俺に話しかけたんだ？」

真波は街の方を指差した。

「ちょっと、買い物に行こうと思ったんだ。だから、付き合ってくれる人探してたんだよ。せっかくだから、ユウナも探そうと思ったんだけど、いなかった」

そうか、ユウナもいるんだな。と、今更思い出す。そのうち、会えるだろう。

「別に、買い物いつでもいいけど、その前に昼飯、食べたいんだけど良いかな？」

「もちろん。どこいく？」

疾風は辺りを見回す。

正午ということもあり、通りはなかなか賑やかだった。どうもここはオフィス街らしく、あまりこれといった食べ物屋は見当たらなかった。軽食、ファーストフード関係の店は、少しあった。

結局、一番近くにあったハンバーガーショップに入ることにした。店内は客でこった返していたが、何とか二人分の席を確保する事が出来た。

そつえば、女の子と二人で食事するの初めてだった……、と思い

つつしかし、とくに何か感情を持つことはなかった。ゲーム内とはいえ、最近一緒に遊んでいたからかもしれない。

食事中、二人は結構話した。基本的にはＢＣＯの事だが……。

「そういえば、今日のバグは本当にタイミング悪かったよね。せっかくグリフォンきてたのに」

真波はハンバーガーをむしゃむしゃと美味しそうに食べながら話す。

「そうはいつでも、あのままやってたら結局負けてただろ。デスペナルティが付かなかった分だけ良いんじゃない？」

「ウーン……」

二人は食事を終えると、街に出た。

疾風は真波の後をついていく。

「……ここって」

真波が立ち止まった場所、そこはアニメ関連のグッズを売っている店だった。秋葉原の店だ。疾風がどうも敬遠していた場所。疾風は真波の異様なはしゃぎように驚きつつ、店に入った。

第5話 ？ 1 / 2（後書き）

すみません中度半端にきってしまいました。明日、更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360t/>

Virtual Mind -Bondage Conect Online

2011年8月2日16時59分発行